# 日本方言研究会

## 第 121 回

## 研　究　発　表　会

## 発表原稿集


**▼午前の部　10 時 00 分～11 時 50 分**

1）長崎県藪路木島方言の音韻変化について ― スッサクを中心に ― ･････････ 前田桂子… 1

2）肥筑壱岐語における有坂・池上法則の例外 ･････････････････････････････ 白鳥詩織… 9

**▼午後の部　13 時 30 分～16 時 10 分**

3）自治体アンテナショップの商品における方言使用
― 言語的・地域的・商品分類別傾向 ―･････････････････････････････ 田﨑璃音…17

4）「ホラ」の用法分類の提案 ―『日本語諸方言コーパス』（COJADS）データをもとに ―
･････････････ 勝又琴那・加順咲帆・赤間咲良・佐藤未依奈・山田はるか…25

5）首都圏方言における否定辞の使用とラ行音の撥音化
― コーパス調査に基づいて ―･････････････････････････ パンチェンコ・ユーリイ…33

**付　録**

方言関係新刊書目 ･･････････････････････････････････････････････････････････････ 41

お知らせ ･･････････････････････････････････････････････････････････････････････ 奥付


令和 7(2025)年 11 月 1 日(金)10 時から

オンライン

# 日本方言研究会会則

昭和 62 年 5 月 22 日　制定
平成 30 年 6 月 16 日　改定

1. 本会は日本方言研究会（Cercle dialectologique du Japon ： Dialectological Circle of Japan ）と称する。
2. 事務所は日本国内におく。その場所は別に定める。
3. 本会は，日本方言研究の促進と研究者相互の連絡を目的とする。
4. 本会の事業は，(1) 年 2 回の研究発表会の開催，(2) 機関誌の発行，(3) その他，とする。
5. 会員は，日本の方言研究に関心を持ち，本会の活動に積極的に参加するものとする。このうち，本会からの情報の提供を受ける個人・団体を連絡会員，機関誌を定期購読する個人・団体を購読会員とする。手続きは別に定める。
6. 役員としては，世話人 12 名をおく。人選は世話人会が行う。世話人の任期は 4 年とし，2 年ごとに半数を改選する。世話人の 2 期重任は認めない。ただし 2 年後の再任は妨げない。
7. 本会の運営のために次の委員会をおく。委員会は世話人と世話人外の委員で構成される。
   研究発表会委員会，編集委員会，総務委員会
   研究発表会委員会は研究発表会に関する業務，編集委員会は機関誌に関する業務，総務委員会は他の委員会の管掌する業務以外のすべての業務を担当する。委員の任期は 4 年とし，同一の委員会における 2 期重任は認めない。必要に応じ，委員会を臨時におくことができる。その構成と任期は別に定める。
8. 経費は，(1) 会費，(2) 寄付金その他，でまかなう。会費の額等は別に定める。
9. 会則の改定手続きは，その都度定める。

世話人　*佐々木冠・椎名渉子・*下地理則・白岩広行・*竹田晃子・*津田智史・*中西太郎・林直樹・*原田走一郎・日高水穂・又吉里美・松丸真大
(*は 2027 年 5 月まで，無印は 2029 年 5 月まで)

研究発表会委員　*佐々木冠（委員長）・*津田智史（副委員長）・*川﨑めぐみ・*坂喜美佳・白岩広行・新永悠人・松倉昂平・松丸真大
(*は 2027 年 5 月まで，無印は 2029 年 5 月まで)

# 長崎県藪路木島方言の音韻変化について　～スッサクを中心に～

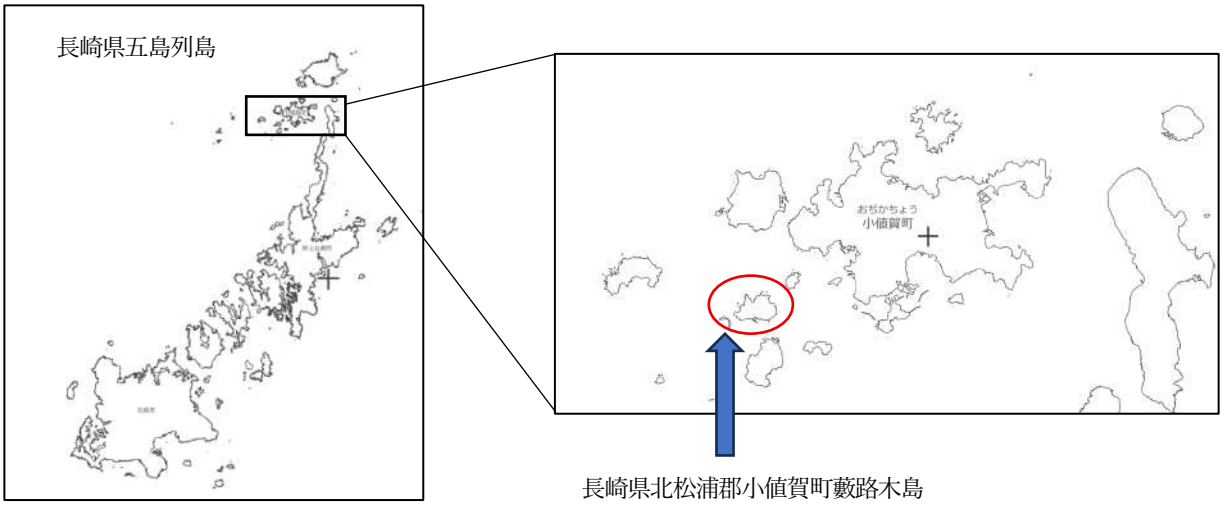
前　田　桂　子[1]

## はじめに

『長崎県小値賀町藪路木島方言集』[2](以下「方言集」と呼ぶ)では、「引き裂く」を「スッサク」、「久方ぶり」を「スッサカタブリ」と表記されており、改めて著者に確認したところ、それぞれ[ssakɯ]、[ssakatabɯri]と発音していた。これらの語形は一定の条件の下、音声変化により成立し、「方言集」の著者には音韻として認識されていると思われる。本稿では藪路木島の音韻的特徴から[ssakɯ]の成立過程について考察する。

（地理的情報）

藪路木島は、長崎県北松浦郡小値賀町にあり、昭和 47 年に集団移住により無人となった島で、以下の地図にあるように五島列島の北部に位置する。




（調査資料と調査方法）

調査方法は、「方言集」の中から「ヒ」と想定される箇所に「ス」と表記された語を採取するとともに、同様の変化を起こしそうな作例を使って調査・分析した。話者、資料の情報と使用機材は以下の通りである。

話　者　：1944 年長崎県北松浦郡小値賀町藪路木島生まれ、男性。1967 年離島。現在は長崎市在住。藪路木島は、平板一型アクセント地域である。

資　料　：古川初義　2017『長崎県小値賀町藪路木島方言集』私家版

調査期間：2024 年 4 月～2025 年 8 月

使用機材：レコーダー（OLYMPUS LS-P4），音響解析ソフトウェア Praat（ver.6.1.16）

## 1　音韻的特徴

---

[1] まえだ　けいこ（長崎大学）kmaeda@nagasaki-u.ac.jp

[2] 古川初義 2017。本資料は、著者の内省による方言語形に簡潔な共通語訳が付されたもので、13000 語余りを所収する。特に発音については［o］［wo］［se］［ɕe］などがそれぞれ、オ、ヲ、スェ、セという表記で丁寧に書き分けられている。

まず藪路木島方言の音韻的特徴を確認する。以下は『九州方言の基礎的研究』1969 に示された長崎方言の特徴と対照して、藪路木島方言の音韻的特徴を私に表 1 にまとめたものである。藪路木島方言については、「方言集」の記述をもとに、話者に確認したものである。

表 1　九州方言の音韻的特徴と長崎方言、藪路木島方言の対照表

| 『九州方言の基礎的研究』1969（九州の音韻の特徴） | 同書，長崎方言の報告（西島宏氏）の抜粋 | 藪路木島方言（前田の調査による） |
|---|---|---|
| 1　長音短呼 | 焼酎[ʃo:tʃu] 鉄道[teddo] | 学校[gakko] |
| 2　短音長呼 | 歯[ha:] 手[te:] | 歯[ha:]　手[te:] |
| 3　連母音 | dai→[de:][dja:]<br>大根[de:kon] [dja:kon] | ai→[e:]　商売[ɕo:be]　大工[de:kɯ] |
| 4　語末、語中の i,u 音が詰る | 鉛筆[empiʔ]　靴[kuʔ]　帯[oʔ]<br>国語[koggo] | なし |
| 5　リ・ル→イ | 車[kuima] ラ行リルの r 音の脱落 | なし |
| 6　エ列音の口蓋性 | セ→シェ　先生[ʃeNʃei] | 先生[ɕenɕei] |
| 7　テ=tʃe | 手[tʃe]　来て[kitʃe]　行って[ittʃe] | 行ったって[ittattɕe]　父[tɕetɕedoN] |
| 8　ツ=tu　タ行 tsu →tu | 角[tuno]　蜂[hati] | なし |
| 9　クヮ音、グヮ音 | 火事[kwaʒi] | 火事[kwaʑi]西瓜[ɕi:kwa]　喧嘩[keŋkwa] |
| 10　四つがなの音 | なし | なし |
| ①　ガ行鼻音 | 国語[kokuŋo]　陰[kaŋe]　鏡[kaŋami] | なし |
| ②　オ列長音の開合 | ô: [u:]　大風[u:kaze]<br>ŏ: [o:]　歌う[utau][uto:] | ô: [ɯ:]　大風[ɯ:kaʑe] |
| ③　イ列音とウ列音の混同 | Ci→Cu　沖　[oku]　柄杓[ɸuʃaku]<br>焚き物[takumon]鏡[kagamu] | 消し炭 [keɕizɯmɯ]　手 毬 [temaɾɯ]<br>柄杓[ɸɯɕakɯ]　焚き物[takɯmoN] |
| | Cu→Ci　きせる[kiseri]<br>みみず[mimiʒi] | 風呂敷[çiɾoɕiki] |
| ④　O→wo | 帯[wobi] | なし |
| ⑤　ザ行音とダ行音の混同 | む か で [mukaʒe]　座 布 団 [dabutoŋ]、雑巾[do:kiŋ] | むかで[mɯkaʑe] |
| ⑥　ダ行音とラ行音の混同 | 窓[maro]　うどん[uroŋ] | ランプ [damp]　ラッキョ[daŋkjo]　ロシア [doɕa]　鉄道[tetsɯɾo:]　電話[ɾenwa] |
| ⑦　リ→ジ（ヂ） | 遠慮[enʒo]、利口者[ʒikomon] | 遠慮[enʑo]、立派[ʑippa] [gippa] |
| ⑧　ラ行子音の実相 | 硯 [suzui] 徳 利 [tokkwi], 塗 物 [nuimoŋ] | 硯 [sɯzɯɾ] 、徳 利 [tokkɯɾ] 、寒 ブ リ [kambɯɾ] |
| ⑨　ハ=ɸa　ヘ=ɸe | 歯[ɸa]　蛇=[ɸebi] | なし |
| ⑩　gw→b　kw→p | なし | なし |
| ⑪　鼻的内破音[tN] | 狐[kitNne] | なし |
| ⑫「ワ」音、消滅　wa→[a]<br>wa→[a] wa→[ga]など | なし | なし |
| ⑬　有声子音のまえにつまる音がくることがあるか。 | 役場[jaʔba]　巻紙[maggami] | 帯ば[obba]、首ば[kɯbba] |
| ⑭　語頭にはねる音がくることがあるか。 | おいしい[mmaka:]<br>うめる[mmeru] | んまか[mmaka] |

| | | |
|---|---|---|
| ⑮ 語中・語尾の子音が、有声化あるいは、無声化することがあるか。 | みしかか[miʃikaka] | おなし[onaɕi]、みしかか[miɕikaka]、ねしきる[neɕikiɾ]、 |
| ⑯ ハシラ→ハシタなどの音変化 | なし | なし |

表にしてみると、1969 年の長崎県全域を対象とした西島氏の指摘と比較しても、藪路木島方言はかなりの項目で九州の音韻的特徴を有することが分かる。本稿では、上表の③に関連して、報告したい。

表 1 の③の「イ列音とウ列音の混同」で西島氏は、「Ci→Cu」の例として、焚きもの[takumon]、柄杓[ɸuʃaku]を挙げている[3]。これらは藪路木島方言でも同じ例が確認できた。ただしよく聞いてみると、藪路木島の話者に場合、タクモンの[kɯ]、フシャクの[ɸɯ]など、音声変化を起こした個所の母音が明確ではないことがあった。3 節で詳しく述べるが、他にも[ɾi]が[ɾ]、[mɯ]が[m]と母音が脱落したような例が広範囲に見られた。

## 2 イ列音とウ列音の混同（母音ｉの弱音化）

以下、本稿で扱う事象に関連すると思われる先行研究の記述を確認する[4]。

原田芳起 1952、同 1954 では、「母音弱化」という用語を用いて、以下の現象を指摘する。

〇右の現象は、比較的広い母韻の後に来る音節がやはり比較的広い母音を本来有していると、後の音節の母音を狭い母音である〔イ〕または〔ウ〕を含む音節に替えることを意味する。母音交替であるが、一途に弱化するものであるから、母音弱化の通則という事にする。

これは、根底に、文節のような音節結合集団の中では、緊張を長くつづけることを出来るだけさけようとするので、広母音がいくつも重なると、どれか脆い音節があると、それを狭い音に変えようとする事を意味する。

誰＝ダリ、ダル　　此れ＝コリ、コル　　其れ＝ソリ、ソル・・・(中略)

腹立てる＝ハルカク、ハーカク（ハリカクもある）　　（原田芳起 1952『熊本方言の研究』）

〇モラウタ＞モロタ＞モルタ　（貰った）　ハラウタ＞ハロタ＞ハルタ　（払った）

ザマムニャー（甚だしい）　トツケムニャー（とんでもない，語源 取付きももない（ママ））

トホムニャー（途方もない）　―以下略―

私は、この母音の弱化現象がはなはだ普遍的に、前母音の広狭強弱のみに依存して起り、それが方言文法にまでなっているのが、上に述べた熊本県の一型地区を主とすることは、このアクセントが、平板式で、特に印象的なのは文節的なものでも、語頭か、語頭から近いあたりに張力の山がおかれて、尻すぼみになる傾向がある事と関係づけられると思う。（中略）一種の母音調和として見られるのではないか。この弱母音化の誘因となっているのは、弱母音[i][u]に対して強い母音であり、また弱化される原母音よりも強いか同勢力の母音である。　（原田芳起 1954「九州方言に現れた母音弱化通則）

〇〔弱母音化傾向〕。右の例のように広母音・中開母音を含む音節の母音が狭母音 ɯ・i になる現象は県下共通の強固な習慣である（原田芳起氏の研究および命名に従う）、[darɯ mo karɯ mo]誰も彼も・[soɽubattenN][soɽibatteN]だけどなど。[kodomo]子供、などのように中開母音がつづくと最後の音節 mo の o 母音が弱化して[kodomɯ]または[kodomi]になる―というより、声の張を失い、弱いあいまいな[ï・

[3] 他に、愛宕八郎康隆 1974 にも長崎県内の Ci→Cu の例が多数報告されているが、[çi]→[s]の指摘は見られない。

[4] 本稿における引用文中の下線やハイライトなどはすべて発表者による。

ɯ]のようになるのが実相である（音の切れ目が著しく低音弱音になる平板一型アクセントの関係が考えられる）。（秋山正次 1979『肥後の方言』P.20）

上記では、隣県の熊本方言において、広い母音が続くと、弱母音[i][ɯ]に替わる傾向がある、という現象について述べている。そして例示は語中語尾に起こる現象の指摘のようである。では、次節では藪路木島方言の例を確認する。

## 3　藪路木島方言の母音弱化現象

藪路木島を調査した結果、表 2[5]のデータを得た。原田 1954 や秋山 1979 の指摘にある名詞、動詞の語中語尾の例はもとより、語頭にも広く母音が変化した例がみられた。原田氏は母音[u]を最も弱い母音と考え、前接音にそれより強い母音がくる場合は母音弱化の誘因となると考えられる[6]が、藪路木島方言では「首」（[kɯbi]→[kɯbɯ]）、「グミ」（[gɯmi]→[gɯmɯ]）のように、対応する現代日本語の標準語形の語中尾が[i]の場合、続いて「子ども」（[kodomo]→[kodomɯ]）、「俺」（[ore]→[orɯ]）等[o][e]の場合、まれに「どこから」（[dokokaɾa]→[dokokaɾ]）の[a]の場合のように、母音の広狭にかかわらず母音が[ɯ]に変化するか、[kɯb][oɾ]のように母音が脱落する様子が見て取れた。ただし、前接母音が狭い場合には母音弱化は起きにくいようで、例えば、「馬」が[ɯmɯ]になったり、「岩」が[iwɯ]になることはないようである。

また、語頭の例も見られ、熊本の場合より広範囲に母音弱化または母音脱落の現象が見られるようである。

表2　藪路木島方言において母音弱化、母音脱落した語

| | | 語中語尾音の弱化例 | | | | | 語頭音の弱化例 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 前接母音 | | | | | 後接音の母音 | | |
| | | [ɯ] | [i] | [o] | [e] | [a] | [ɯ] | [o] | [a] |
| 現代標準語形の母音 | [i] | 首[kɯb]<br>[k b]<br>グミ[gɯm]<br>消し炭<br>[kegizɯm]<br>瓜[wɾ] | 尻[ɕiɾ]<br>[ɕiɯ]<br>明久<br>[akissa] | 蝙蝠<br>[komorɾ]<br>鳥 [toɾ] | 見せびらかす<br>[misebrakas]<br>大しゃべり<br>[ɯzaberɾ] | 錨[ikaɾ]<br>手毬[temaɾ]<br>針[haɾ]<br>焚き物<br>[takm oN] | 引連れていけ<br>[stɕiretɕike]<br>[ɕitsɯ retɕike] | ヒソヒソ話<br>[ssossobana i]<br>[ɕisossobana i]<br>拾った[_ ta] | 久賀島[ssakazim a]<br>引き裂く[ssak]<br>久子[ssako]<br>庇 [ssaɕi]<br>滴る[stadaɾ]<br>柄杓[ɸɕak] |
| | [o] | | | 子ども<br>[kodom] | 佐世保[saseb]<br>あせも[aseb] | 守る[mab ɾ] | | | |
| | [e] | | | 俺[oɾ]<br>これ[koɾ]<br>どれ[doɾ] | | | | | |
| | [a] | | | | | どこから<br>[dokokaɾ] | | | |

＊アンダーラインは音声変化の箇所。なお、助詞「ん」が接続したり丁寧に発音した際に母音[ɯ]が現れる場合がある。

[5] 本稿では、より狭い母音に変化することを、原田 1954 に倣って「母音弱化」と呼ぶが、今発表のテーマでは、特に母音[i]→[ɯ]の変化がそれに相当する。また、表中の「首」[kɯb]のように、語末の母音が聞こえない場合は「母音脱落」とする。表 2 では母音弱化の例と母音脱落の例を併記した箇所があるが、表記していない場合にも丁寧に発音をすると語末に[ɯ]が現われる可能性がある。なお、接続する母音による整理の方法は小川晋史 2025 を参考にした。

[6] 原田 1954（p. 3）「以上の例によって、九州方言において、前に来た母音が広い母音で、そこに張力の強まりがおかれ、それが急に解かれると次に来る母音が、もっとも弱い母音[u]に向って弱化せんとする傾向が見られ、ある地域では、弱化母音のあるものを[i]で止めておこうとする傾向が知られる。」とあり、[u]が最も弱く、次に[i]が弱いと位置づける。

さて、先行研究に語頭の母音弱化の報告は見つけることができなかったが、藪路木島では、表2に示した通り、語頭が変化した例が一定数見られた。特に日本標準語形の母音が[i]の場合に集中している[7]。これらの語形は他の方言集では確認できなかったものの、近隣にわずかながら類例が見られた[8]ので、ありえない変化ではないと考える。

スゴキ　腰紐　　スッパク　嘘言　　（1953『島原半島方言集』）
フト　　スク　　フーズキ　　など　　（1983『講座方言学９』「長崎県の方言」）
ヒサシ-ウ（久）　　フサシ-ウ　　（1975『佐賀県方言辞典一斑』）

スゴキは「シゴキ」、スッパクは「ヘッパク」がより広域で見られる形である。また、フトは「人」、フーズキは「鬼灯」である。ここでも語頭の母音弱化の例は、サ行やハ行に集中して見られたことに注目したい。

## 4　スッサクについて

### 4-1　スッサクおよび、その他の用例

本稿で注目するスッサクは、語頭の音韻変化の例である。他に、アキッサ[akissa]（明久）のように語中が変化した例もあるが、今のところ他に採集できていない。以下に、日本標準語形を始め全国的に広く[çi]と発音される部分が「方言集」において[ス]で現われた例を引用する（①～⑪）。

① スサシ　ひさし　庇　家の・・・
② スッサカタブリ　久しぶり　久方ぶり
③ スッサク　引き裂く　張り裂く　（語頭スは無声音）
④ スッサゲチキタ　威勢良く掴む様に下げてきた　一升ビンば・・・
⑤ スッサケチシマウ　二つに裂けてしまう　木の枝が・・・
⑥ スッサシュ　久しく　ずいぶん久しく
⑦ スッサシュイタチョラン　久しく行ってない
⑧ スッサラエチイタ　掠める様に持ち去った　全て持って行った
⑨ スッソボカレタ　強く引っ張られた　(以上　p.162)
⑩ スッソボク　急に引っ張る　強く引く　(p.163)
⑪ マタバスッサクゾ　股を張り裂くぞ　(p.288)

また、聞き取り調査で[s]に音声変化を起こした例として得られたのが、以下の⑫～⑱である。

⑫ [ssako]　←　久子
⑬ [ssakaʑima]　←　久賀島
⑭ [ssossobanaɕi]　←　ひそひそ話
⑮ [akissa]　←　明久
⑯ [ssakatabri]　←　久方ぶり
⑰ [stsɯretɕike][9]　←　引き連れていけ
⑱ [sttsɯkɯ]　←　ひっつく

---

[7] チューノ（手斧）、ヅモル（どもる）、ミュート（夫婦）、フータン（頬たん）など、長音の例はスッサクとは音環境の条件が異なるため今回の考察から除外した。

[8] なお、長崎県外にも次の例があるようである。「すさし　玄関。表門。石川県石川郡 404　《しやし》 岐阜県飛驒 502」「すっさく【―裂】〔動詞〕引き裂く。富山県砺波 397」（日本方言大辞典）

[9] スツレチケは「引き連れていけ」である。例⑰⑱ともにスの後接母音が[ɯ]の音節の例であり広母音ではないが、「引き」がすでに接頭語化した可能性がある。

上記からわかるように、いずれも語頭[çi]の後に[sa]が続く例か、その間に促音が挿入された例である。また[akissa]のように[s]が語中に来る例や、[ssossobanaɕi]のように[so]が続く場合もわずかながらあった[10]。

### 4-2 音声分析

「方言集」では、文字で明確に「スッサク」と書かれているが、実際の音声を確認する。以下は、音響分析ソフト Praat（ver.6.1.16）で分析した結果である。

[ssakatabri]、[ssak]、[ssaɕi]ともに 1 音目の[s]については、少なくとも母音が明確ではなく、無声化しているか、母音脱落と言われるような現象であることが分かる。調査の範囲では、自然な発話としては母音が脱落しており、話者に尋ねると、[sɯsakatabɯri]［ sɯsakɯ]にように母音[ɯ]が入ると不自然だという。

図 1　「久方ぶり[ssakatabɯri」「引き裂く[ssakɯ]」　　＊母音が落ちている。[s]子音が長い。

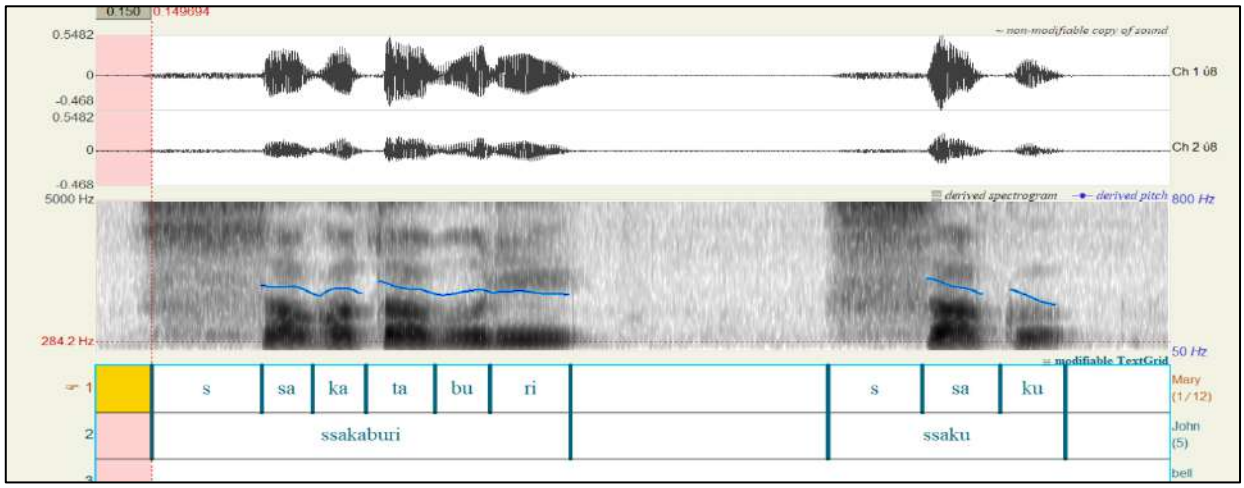
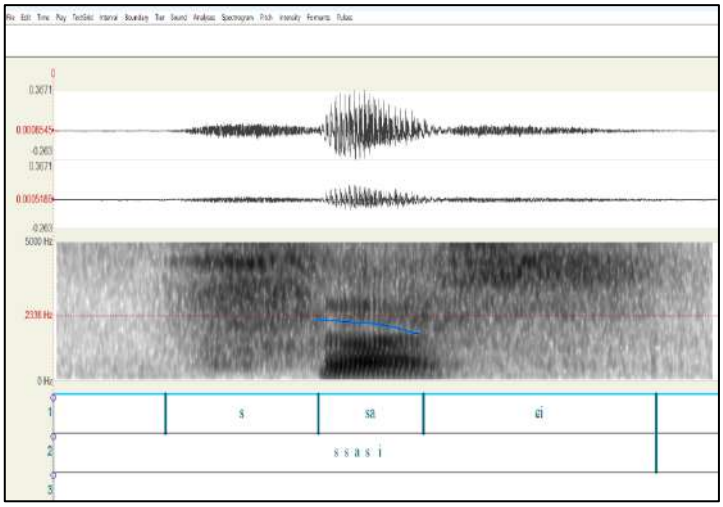



図 2　「庇（ヒサシ）[ssaɕi]」　　＊1 音目の母音が弱い。




## 5　母音弱化を起こす条件

### 5-1　[çi]の後続音別調査

---

[10] スソスソバナシ[ssossobanaɕi]について改めて話者に尋ねると、「むしろ『シソシソバナシ』と聞こえることが多かった」という。後続音が[so]の用例は他にないことから、[çi]から[s]への変化が確実なのは後続音[a]の場合だけということになる。

前節では、[çi]に[sa]が続いて語頭の母音脱落と捉えられる現象を確認したが、音声変化の範囲を見るために、[çi] に[sa]以外の音が続く場合と、[çi]以外の子音の場合を観察する。

まず、[sa]以外の後続音の場合に、上と同様のことがあるかについて、作例を使って話者に確認してみた。作例の方針としては、無声化は無声子音に挟まれた狭母音に起きやすいと一般的にいわれるので、[çi]に無声子音[k] [ɕ][s][t][tɕ][ts]が続く単語と、[ɾ]、鼻音[m]、濁音[z]、促音/Q/が続く以下のような語を準備した。その結果、いずれも語頭の[çi]が[s]に変化することはなかった。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| [a] 日当たり | [ka] 光 | [ki] 引出し | [ko] 飛行機 | [ɕi] 菱形 |
| [sɯ] ヒステリー | [se] 筆跡 | [so] 潜む | [za] 膝 | [ʑi] 肘 |
| [ze] 肥前 | [ta] 額 | [to] 人 | [tɕa] ひっちゃかましか | [mo] 紐 |
| [ɾa] ひらくち | /Q/ 引っ張る、引っこがす | | | |

### 5-2 [sa]の前接音別調査

次に、[sa]の前接音について観察する。「久子」は[ssako]と発音され、「引き裂く」は[ssakɯ]と発音されることを上で述べた。また、これらの語頭の[s]は、[sa]に前接する[çi]が変化したものと考えたが、それ以外の音ではどうか。[çi]と同じく母音が[i]の音で、[s]と変化するものがないか調査を行なった。調査では「久子(ヒサコ)さん」と揃え、女性の名前の作例によって聞き取りをした。

| | |
|---|---|
| [i] 伊佐子（イサコ）さん、*[11][ɯsako] | [ki] 喜佐子（キサコ）さん、 *[ksako] |
| [ɕi] 志佐子（シサコ）さん、 [ssako] | [tɕi] 千紗子（チサコ）さん、 *[tssako] |
| [ni] 仁佐子（ニサコ）さん、 *[nsako] | [çi] 久子（ヒサコ）さん、 [ssako] |
| [mi] 美佐子（ミサコ）さん、 *[msako] | [ɾi] 理沙子（リサコ）さん *[ɾsako] |

この結果、「ヒサコ」以外では「シサコ」が[ssako]と発音されるのみであった。

また、[sa]の前に[ɸɯ]が来た場合に[s]に変化するかについても尋ねたが、変化しないとのことだった。

[ɸɯ] 房子(フサコ) → *スサコ *[ssako] cf. 一房(ヒトフサ) → *シトスサ *[çitossa]

さらに「人(ヒト)」が[ɕito]、「一筋（ヒトスジ）」が[ɕitosɯʑi]となって、硬口蓋摩擦音[çi]が無声後部歯茎音[ɕi]に変化することが分かった。逆に「教室（キョーシツ）」は「キョーヒツ」[kjo: çitsɯ]とはならず、後舌化する例は見られなかった。

## 6 まとめ

以上、スサカタブリ[ssakatabɯri]やスッサク[ssakɯ]は、[sa]の前の[çi]に特徴的に起こる音声的実現であることを確認したが、以下、その変化の過程について考察する。パターンとしては以下の 2 つが考えられる。

Aパターン [çi] → 子音変化 → [ɕi] → 母音脱落＋子音変化 → [ s ]

Bパターン [çi] → 母音変化 → [çɯ] → 母音脱落＋子音変化 → [ s ]

まずAについて。話者によると、硬口蓋摩擦音[çi] が後部歯茎音[ɕi]と変化した例として、「人」[çito]→[ɕito]、「ひとつ」[çitotsɯ]→[ɕitotsɯ]、「引き解く」[çittokɯ]→[ɕittokɯ]）などが挙げられる。しかし「久賀島」を[ɕisakaʑima]、「久子」を[ɕisako]と発音することはないという。「人」[ɕito]も[sɯto][sto]にはならないので、A の子音変化の可能性は薄い。

一方の B パターンについても、「久賀島」「久子」を[çɯsakaʑima]、[çɯsako]ということもないそうなので、やはり該当しない。

---

[11] ＊は実現不可能な形を示す。以下同様。

では、どう考えるべきか。スッサク、スサコなどの成立に関していえば、この方言の強い傾向である、母音脱落が最初に起こったと考えるのが適当ではないだろうか。上述したように、藪路木島では語頭、語中尾に関わらず、また、現代標準語形の母音や前節母音の種類に拠らず、母音が脱落する現象が広く見られた。そのため「ヒサコさん」の[çi]の母音が落ちるのはその一環ともみられる。また、[çi]が[s]となるのは、後に[sa]が続く場合に起こりやすいという特徴も見られた。後続子音[s]に引かれる形で[ç] が[ɕ]さらに[s]と前舌化し、[ssakɯ][ssako]となって、「スッサク」「スサコ」と「方言集」の著者が表記するまでの語形が成立したのではないかと考える。

ヒ-サの連続により、**[ çi ]** → 母音[i]の脱落 → **[ ç ]** → 続く[sa]による逆行同化 → **[ s ]**

先述したように、藪路木島においても「首」[kɯbɯ]、「尻」[ɕirɯ]のように、語末に母音がついた発音が観察された。これらの例は、先行研究のいう母音弱化に類似しているが、藪路木島の場合は当地に広く見られる現象である母音脱落を先に起こし、その後、丁寧に発音したり助詞が後続した際に母音が挿入されることがあったと考える。

以上のように、藪路木島において、硬口蓋音[çi]は[s]に変化する傾向があったが、類似の音環境であるにも関わらず[ɸ]となる語「柄杓（フシャク）」もあった。これをどう考えるかは今後の課題であるが、現在のところ、[ɸi]からの変化の可能性があるのではないかと考えている。長崎においては 19 世紀初頭まで「ヒ」は[ɸi]であった可能性が高い[12]。その頃に藪路木島で母音脱落を起こしたのであれば、[ɸɯɕakɯ]として定着するのは自然な変化と言える。しかし、これはまだ証明する術がないので、可能性の指摘にとどめておく。

＜参考文献＞
古川初義 2017『長崎県小値賀町藪路木島方言集』私家版
原田芳起 1951「九州方言に現れた弱母音化通則」日本音声学会会報 86 号
原田芳起 1952「九州方言に現れた弱母音化通則(2)」日本音声学会会報 87 号
原田芳起 1952『熊本方言の研究』日本談義社
山本靖民 1953『島原半島方言集』
九州方言研究会 1969『九州方言の基礎的研究』風間書房
愛宕八郎康隆 1974「肥前地方の中舌母音の痕跡事象」長崎大学教育学部人文科学研究報告 23 号
清水平一郎原著、川副博著 1975『佐賀県方言辞典一斑』
秋山正次 1979『肥後の方言』桜楓社
愛宕八郎康隆 1983「長崎県の方言」『方言学講座 9 ―九州地方の方言―』国書刊行会
上村孝二 1998『九州方言・南島方言の研究』秋山書店
清水平一郎『佐賀県方言辞典一班』
徳川宗賢監修 1989『日本方言大辞典』小学館
北原保雄他 2000『日本国語大辞典大二版』小学館
伊福重一 2002『島原地方の方言』まほろば詩舎
前田桂子 2025「日蘭辞書『ドゥーフ・ハルマ』に見る長崎方言～成立と言語意識～」東亜国際教育与人文交流国際学術会議論文集
小川晋史 2025「阿蘇郡小国町の方言における異形態の出現パターンについて」国立国語研究所令和 6 年度 第 2 回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会発表資料

謝辞： 本発表にあたり、方言話者の古川初義氏には丁寧なご説明をいただきました。また、長崎大学の郭昱昕先生、大阪大学の原田走一郎先生には音声分析をはじめ、様々なご助言をいただきました。お礼申上げます。なお、本研究は 2022 年度基盤研究(C) 22K00583、および 2023 年度基盤研究(C)23K00553 の助成を受けています。

[12] 前田桂子 2025 参照。19 世紀初頭の長崎では当時の「ヒ」の音は[ɸi]であったと言われ、出島阿蘭陀商館長の自筆原本「ドゥーフ・ハルマ」においても、唇音を表す「f」で写されている。

# 肥筑壱岐語における有坂・池上法則の例外

白鳥 詩織[1]

## 1　はじめに

琉球諸語の九州からの南下は明らかであり（Pellard 2015），ある時期の九州には琉球諸語と近縁な言語変種が存在したことが確実である。他方，近代九州の変種がその古代九州の言語変種の子孫であるかに定説はない[2]。本報告はこの問題の解決のための研究の一つである。

稿者は，五十嵐（2021）の S3 線以南 S4 線以北の言語変種（対馬，福岡県筑後地方，佐賀県，長崎県，熊本県）を研究対象として選定，音韻史的な興味のもと文献調査した。S3 線以南 S4 線以北の言語変種を拙論では**肥筑語**と称する。肥筑語のうち，資料が豊富かつ，直観的に興味深い音韻対応が見られる長崎県壱岐島の変種を主要な分析対象として選定し，**肥筑壱岐語**と称する[3]。肥筑壱岐語の大規模な語彙資料は麻生（1930=無, 1937=続, 1975a=補，1975b=テ）と鳥巣（2019=き）である。また平山（1951=平）にも多少の語彙の記述がある。拙論はこれらから得られる肥筑壱岐語の語彙項目の分析により，所謂「連母音」の融合が発生する前の早期言語・先壱岐語（pre-Iki, pIk）を再建し考察する。

本報告における有坂・池上法則の例外とは，上代語に有坂の第一則・第二則が形成されるよりも前に存在したことが予想される，オ列乙類相当の音節とオ列甲類/ウ列相当の音節が共存する音節結合（*$o_2$$o_1$, *$o_2$$u, etc.）のことである。本報告は，肥筑壱岐語に上代語が失った有坂・池上法則の例外に関連する対立に由来する対応が存在する可能性があることを報告する。2 節では有坂・池上法則の形成過程を導入する。3 節では肥筑壱岐語から先壱岐語を再建する。4 節は先壱岐語における有坂・池上法則の例外の問題を指摘する。5 節は結論で，問題の母音対応の肥筑語のほぼ全域における観察を指摘する。

## 2　有坂・池上法則の例外とは？

日本諸語（Mainland Japonic）の音韻史研究の着手のためには，日琉祖語[4]の六母音体系（6VH）の内的再建により音韻体系の予測性能を高める必要がある。本節では，有坂の第一則と第二則の形成が音変化によるとする仮説を導入し，最後に本報告の枢要である有坂・池上法則の例外を定義する。

有坂・池上法則とは，有坂秀世と池上禎造により独立に発見された上代語（OY）の単形態素の母音配列規則である（有坂 1955; 池上 1932）。有坂は有坂・池上法則をおよそ (1) に定式化した。以下のうち，本報告の議論に使用されるのは太字の (1a) と (1b) である。

(1) **有坂・池上法則**

a. **第一則**　上代語は，同一の形態素において $o_1$ と $o_2$ が共存しない。

b. **第二則**　上代語は，同一の形態素において u と $o_2$ が共存しにくい。

c. 第三則　上代語は，同一の形態素において a と $o_2$ が共存しにくい。

---

[1] しらとり しおり（所属先なし［中央大学学部生］）shiratorishiori1[@]gmail.com

[2] 五十嵐（2021）は，発生確率の低い共有改新の入子状の分布（「マトリョーシカ分布」）により近代九州諸変種が琉球諸語とともに単系統群をなすと主張した。五十嵐（2021）には懐疑論もあるが（i.a. ペラール 2021; Igarashi 2025），その上に新規な歴史比較研究を展開できるため（五十嵐 2022, 2024），従来の研究プログラムよりも仮説の生産性が大きい見込がある。

[3] 話者の言語意識と乖離する可能性があるが上代より前の分岐を明示するため平子・五十嵐・ペラール（2024）の用語により採用する。「～語…方言」方式は中心と周辺を不必要に暗示するので上位と下位のクレードの名前を連結し「～…語」と呼ぶ。

[4] 現行の日琉祖語の六母音体系（6VH）は，上代語の内的再建を通じて得られた四母音体系（*a *ə *i *u）に，比較方法により *e *o を追加した体系にすぎない（cf. Pellard 2024: 40-42）。従って本報告は 6VH *ə を *$o_2$，6VH *o を *$o_1$ として，包括記号様に表記し，再建形が上代語によるものにすぎない（i.e. 祖音素ではない可能性がある）ことを明確にする。また，*a と母音調和対をなす *$o_2$ を特別に *ä と表記する場合がある。*ä は祖音素であると予想される。

白鳥（2024b）は，(1) が音法則と未知の母音体系のもとでの舌根調和の崩壊（decay）の相互作用により形成されたとする枠組を提示した。それによれば[5]，上代語の $o_2$ は少なくとも二種類の母音が合流したものであって，うち一つは $o_1$ に相当する母音と調和対をなすと予想しなければならない[6]。本報告は原則として従来の 6VH を使用することで混乱を避ける。然し，厳密さのため，6VH $*o_2$ を，6VH *a と母音調和対をなす場合に，特に ***ä** と表記することがある。

白鳥（2024b）では行論の関係上，(1b) の起源について福田の法則（$*o_2 > o_1$ /u$__）を再提唱するに留まったが，不十分であり，(1b) の起源の包括的説明のためには音法則がもう一つ必要である。舌根調和予想の観点からは 6VH $*o_2$$u を示す形態素は豊富に存在しなければならない。然し白鳥（2024b）の仮説によって得られる上代語も音節結合 $o_2$$u の語例が依然として「極めて稀」である（福田 1965: 161, 165, et passim）。この分布からは，*u$$o_2$ と同様，何らかの音変化の経験が示唆される。本報告は (2) の仮定による音節分布の偏りの説明を提案する[7]。

(2) $*o_2$$u_2 > OY $o_2$$o_2 :: EMJ o$o

(2) において **$*u_2$** は, 上代語に u として反映する母音のうち, この音変化を経験するものを指す[8]。紙幅の関係でさらなる挙例と細かな論証は略すが (3, 4) などの主張は容易である。EMJ には語境界を挟んで (2) が発生する語が散発的に見られるので，(2) の存在を検出しやすいとみられる。

(3) $*w[o_1]t[o\{_1, _2\}]=tu_2\#pi_1$【遠方=GEN[9]#日】> EMJ wótótópì【一昨日】[10]
(4) $*=no_2\#\{ú, ó\}pai$【=GEN#上】> EMJ noope（山口 1985: 81）

以上の議論をまとめると，有坂・池上法則の起源としては，次の仮説が想定されることになる。

表 1. 有坂・池上法則の起源

| 起源 |
|---|

[5] 白鳥（2024b）は 6VH と舌根調和の存在を前提に，(1a) と早田輝洋の舌根調和仮説との間の理論的矛盾の ad hoc な音変化による修正を試みる。具体的には，(1a) の起源のために，$*o_2$ に隣接する $*o_1$ を $*o_2$ に置換する母音同化を想定する。然し，語源分析から，6VH $*to_1$-$ko_1$-$ro_2 > to_2ko_2ro_2$【所】，$*p[o_1]Nto_1$-$ro_2 > podo_2ro_2$【（夜の）頃】などの少数の単語の母音同化に，母音調和と無関係な回帰的な適用を想定しなければならない。単なる母音同化での回帰性の仮定は自然性原理に反する。不自然な結論が導かれるのは，仮定される 6VH $*o_2$ の舌根調和対が 6VH *a のみであるために，6VH $*o_1$ と同源の 6VH $*o_2$ を母音同化によって説明しなければならなくなるためである。故に 6VH は改訂の必要がある。

[6] これをうけ，白鳥（forthcoming）は 6VH $*o_1$, *au の *ö, *o への発展的解消を提唱する。

[7] (2) は，福田（1965: 118）が $To_2yuuke_2$（記〈登由宇気神〉）から抽出した $to_2yo_2$【豊か】の異形態 $to_2yu$ を材料にしてその可能性を暗示しつつも，恐らく推古朝遺文に代表される文献学的な古例がないことから「いずれが古形であるかは別問題」（福田 1965: 120）と述べて主張に慎重になったものである。

[8] 内的再建によって得られた母音であって祖音素ではないことを明示するための表記法である。上代語の $o_2$$u は著しく少なく，固有名詞を除けば全てが三音節以上であることから（$to_2busa$, $ojo_2dure$, $mo_2jura$），$o_2$$u をしめす語彙は語根レベルのものでなく，少なくとも一部が複合語における不調和（disharmony）に由来する可能性が否定できない。また上代語の $o_2$ の形成過程には舌根前伸性母音の再編成が関与する蓋然性が大きいし，舌根調和予想を徹底するなら日琉祖語には八個の母音を再建するのが経済的である（白鳥 in review）。故に $*u_2$ は *u と調和対をなす舌根前伸性母音 *ü を含むと予想される。然し，本報告が示す証拠のみによって断定するのは過度に思弁的である。

[9] **グロスと略語** EMJ: 中古語 ENJ: 近世語 GEN: 属格 LMJ: 中世語 LOJ: 初期の中古語 OY: 上代大和変種 pIk: 先壱岐語 PJ: 日琉祖語 pSO: 先周防大島語（白鳥 2024a の「周防大島祖語」） PTw: 高縄祖語（白鳥 forthcoming） RT: 所謂「連体形」接辞 6VH: 六母音体系日琉祖語

[10] ここで $*o_1$$o_2$ を再建しておくのは pIk *ototoi であることによる。ただし $*o_2$ が 3 種以上の母音の包括記号である可能性は十分にあるため，あくまで仮想的なものである。

| | |
|---|---|
| **第一則（$o_2$と $o_1$が共存しない）** | (a) $*o_2\$o_1 > o_2\$o_2$<br>(b) $*o_1\$o_2 > o_2\$o_2$ |
| **第二則（$o_2$と u がほぼ共存しない）** | 福田の法則<br>(c) $*o_2\$u_2 > o_2\$o_2$ |
| **（参考：第三則［$o_2$と a が共存しづらい］）** | （cf. 白鳥 2024a, in review） |

よって，本報告の題目に示した有坂・池上法則の例外は，(5) と定義される[11]。

(5) **有坂・池上法則の例外**

表 1 の (abc) と異なる音変化を経たために (abc) と異なる母音対応を呈すること。

## 3 pIk の音韻体系

肥筑壱岐語は /i u e o a/ の 5 母音体系である。本節では，作業仮説として，適切に古い時期の肥筑壱岐語が肥筑壱岐語に類似した 5 母音体系だと仮定する。その上で，内的再建および比較再建に基づき，肥筑壱岐語から所謂「連母音融合」以前の早期言語・先壱岐語（pIk）を再建し音対応を考察する。

(6) から，肥筑壱岐語の長母音 e:, o: の一部は pIk の母音連結に遡ることがわかる。

(6) 所謂「用言」の内的再建

kog-【漕ぐ】, ke:zi【漕いで】< pIk *koi-d[e]
nak-【泣く】, ne:ti【泣いて】< pIk *nai-t[e]
aw-【会】, o:te【会って】< pIk *au-te
no:nar-【なくなる】< pIk *na-u#nar-

肥筑壱岐語の e:, o: が pIk の遡る母音連結は，通常，中央文献系変種や瀬戸内海諸変種，或は周辺の肥筑語変種など, 肥筑壱岐諸変種の外群に属する言語変種との比較によって再建される。hoito:【物乞】, tenogoi【手拭】など肥筑壱岐語で oi, ai を示すものは，全て借用語と判断される。

表 2. 比較方法による pIk の「連母音」の再建

| 外群 | | | pIk | 肥筑壱岐語 | | 意味 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| **ai** | LMJ | aite【id】 | *aite | e: | e:te | 相手 |
| | LMJ | ɸai【id】 | *hai | | he: | 灰 |
| | PTw | *towa-【遠い】 | *towai | | towe: | 丈 |
| | LMJ | kiai【id】 | *kiai | | kie: | 気合 |
| **oi** | LMJ | dojomek-【響く】 | *doimeki | | de:meki | 雷鳴 |
| | 熊本 | tenugoi【id】 | *tenugoi | | tenuge: | 手拭 |
| | LMJ | jo【夜】ibari【尿】 | *joibari | | je:bari | 寝小便 |
| **e(i)** | EMJ | sě【カメノテ】 | *se{i, e}kuzuma | | se:kuzuma | ヒザラガイ |
| | LMJ | kasei【加勢】 | *kaseido | | kase:do | 加勢する人 |
| **oo** | LMJ | oos-【id】 | *oos- | oo | oos- | 育てる |

[11] (1) は共時的な傾向性で，日琉祖語の音韻論ではないから，(5) の命名は誤解を招く。然し，遺憾ながら本報告の段階では，この非本質的な命名によらなければ過度に思弁的になる。

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | LMJ | ɸɔ:【id】 | *hau | | ho: | 方 |
| | LMJ | bokutɔ:【木刀】 | *bokutau | | bokuto: | 棒 |
| **au** | LMJ | zɔ:【id】 | *zauwata | o: | zo:wata | 臓器 |
| | LMJ | mɔ:s-【id】 | *maus- | | mo:s | 申す |
| | LMJ<br>EMJ | ɔ:ke【id】<br>apu-na~apu-na【分相応】 | *auke | | o:ke | 嵩 |

中央文献系変種との比較から，肥筑壱岐語の u: は pIk *ou もしくは *uu に遡ることがわかる。近代肥筑壱岐語で u: を示さない komoso:kaburi【虚無僧】などはすべて借用語であると判断される。この変化を呈さない語はかなり多い。また，動詞や形容詞のパラダイムの内的再建によってこの母音連結を再建するのは困難である[12]。以上から，音変化が相対的に古い可能性がある。

表 3. 比較方法による pIk *ou, *uu の再建

| 外群 | LMJ | pIk | 肥筑壱岐語 | 意味 |
|---|---|---|---|---|
| | no:na-【id】 | *nounasi | nu:naɕi | 無能 |
| | ko:ze-【id】 | *kouze- | ku:ze- | 病気が悪化する |
| **ou** | itpjo:【id】 | *iQpjou | iQppju: | 一俵 |
| | zo:sui[13]【id】 | *zousui | zu:si: | 雑炊 |
| | ko:du【id】 | *kouzu | ku:zu | 亀 |
| | ko:ja【id】 | *kouja | ku:ja | 染色業 |
| **uu** | ku:【空】 | *kuuni | ku:ni | 分別なく |
| | du:tai【id】 | *zuutai | zu:tai | 図体 |

## 4　先壱岐語における有坂・池上法則の例外

pIk には，南国語派の外群（とくに中央文献系変種）の o$o に対応する語彙について，下掲の表にしめす一対多対応がみられる。本節は母音対応Ⅱが有坂・池上法則の例外に由来することを論証する。

表 4. pIk における母音の一対多対応

| 外 | pIk | | 語例 |
|---|---|---|---|
| | I | *(o$)o$o | *kokoro【心】，*otogo【末子】，*oos-【育てる】，*jorosi-【宜しい】，*oso-【遅い】，*tobosi【案山子】，*otorosi-【恐ろしい】，†oboe-【覚える】，etc. |
| **o$o** | II | *(o$)o$u | *obu-～*obuta-【重い】〔続〕，*tokoru【所】〔続〕，*jorukob-【喜ぶ】〔続〕，*sokunaw-【損なう】〔続〕，†tobuke-[14]【(惚ける)】(≍ netobuke-【寝惚】)，*[ou]-【多い】，*-otuko[15]【男（卑称)】〔続〕，*h[ou]【頬】〔き〕，*ozum-【目覚める】，*k[ou]ri【氷】〔続〕，etc. |

中央文献系変種の音韻体系からは母音対応Ⅱを説明できる経済的な音法則を得ることが極めて困

[12] aru:【洗-RT】, waru:【笑-RT】などは，*…ow-u に由来する可能性もある（cf. pSO *…om- << *…am-；白鳥 2024a: 8-9）。
[13] 「雑炊」は当て字とされる（日国大）。
[14] このほか異形態 toboke- も存在する。こちらは借用ないし中央文献系変種からの類推による形式と想定する。
[15] このほか異形態 -otoko も存在する。こちらは借用ないし中央文献系変種からの類推による形式と想定する。

難である[16]が，日琉祖語の分節音によると体系的な説明を得られる見通しがある。

(7) 音法則の定立が困難な母音対応Ⅱの事例

a. HV *mo の分裂

EMJ $^{A}$omo- :: pIk *obu- ~ *obuta-【重い】〔続・き〕; 意味領域【感覚】【物理世界】

EMJ òmó :: pIk †omo【面】（≍ omoito:nar-【うんざりする】〔補〕）; 意味領域【身体】

b. HV *ro の分裂

EMJ tòkòrò :: pIk †tokoro【山芋】〔テ: 473〕; 意味領域【飲食】【農耕と植生】

EMJ tókóró :: pIk *tokoru【所】; 意味領域【位置関係】

母音対応IIを表面上示すのは，稿者が把握するかぎり，機能形態素 4，内容語 11 の計 15 語である。15 語のうち，機能形態素は一般に文法化の進行に伴って侵蝕（erosion）を受ける可能性がある[17]ことと，論証のために更に多くの前提を導入する必要があることから，本報告では，一旦，除く。*tokoruteN【心太】も *tokoro-pute【野老-天草[18]】からの散発変化[19]による可能性があるので除く。

よって本報告が議論する pIk の母音対応IIは，表 4 に示した内容語 10 語からなる。内容語 10 語のうち過半数の 7 語は，有坂・池上法則の例外 *$o_2$${o_1, u_2}$, *$o_1$$o_1$$ä に遡る語源を現段階で提示できる[20]。

(8) pIk *tokoru < *$to_1$-$ko_1$-rä【場所-場所-場所[21]; 所】（白鳥 2024b: 47; 山口 1985: 94）

(9) pIk *[ou]-【多い】< *$o_2$-$po_1$【*大きい-*頭>秀[22]; 多い，大きい】（cf. 白鳥 2024b: 45-46）

(10) pIk *otuko【男】< *$wo_2to_1$[23]-$ko_1$【変若-子; 男】（cf. 五十嵐 2022: 11）

(11) pIk †tobuke-【惚ける】< *$to_2$[24]-N-$po_1$kai[25]-【跡 ~ *傷[26]>*汚名[27]-呆ける】

---

[16] 散発変化の想定は記録のない音韻史における最後の手段であり，「歯止めがなくなって何でも説明できてしまうことになる」（上野 2006: 34）陥穽があるためある種の理論的美徳を欠く。(7a) の意味領域は，白鳥（2024a: 4）が通言語的な借用可能性にもとづいて設定した「借用語の基準」に準ずれば，資料の少ない言語の音韻史を論ずるさいには原則として借用語でないと想定すべきであり，(7b) も，その認定に消極的になるべきである。(7ab) は前後の音節，音節数の何れによっても説明することが困難である。高起式が相関する可能性があるが，同じく高起で音節構造の類似した *tomoi【共に】〔続〕，†koro【子】（≍ kaNkoro【大根の切り干し】）などが経験しないことを説明するためには音節数・前後の音節・アクセントの全てが条件に関与する必要がある。かかる音法則はそのまま想定するだけでは経済性を著しく欠くため，主張のためには独立の論証を必要とする韻律体系を導入する必要がありそのままでは危険である。このため，本報告の仮説が現時点では最良の説明である。

[17] 具体的な過程には侵蝕による母音脱落とその後の狭母音の語末添加が想定される。同様の再音節化は島原半島に盛行する。

[18] (3) において【天草】を意味する *pute は，八丈語・三重・鹿児島 buto【天草】および，OY $KO_2KO_2RO_2$**BUTO$_1$**【天草】，近世防州 o**[ϕ]uto**（『両国本草』〈神馬藻　防ニ ヲフト〉）【神馬藻】，八丈語 asi**buto**【鬼草】，和歌山 kaN**buto**【天草】，三宅島 oki**buto** ~ asi**buto**【鬼草】，などの後部要素，静岡 **buto**kusa【紐海苔】の前部要素と同源とみられる。

[19] *tokoro-pute > *tokoroute（ハ行転呼）> *tokoru:te >> *tokoruteN（音量転換）。同様の現象は肥筑語では島原半島に盛行する。

[20] 少なくとも *sokunaw-, *obu- については，他の日本諸語との比較によって有坂・池上法則の例外に遡ることを論証できると予想される。機能語の母音対応は前提をいくつか導入すると容易に論証できる。何れも別報に譲る。

[21] これらの語義はそれぞれ細異すると見られるが，紙幅の関係で論じきれない。OY -ra ~ -$ro_2$ から，*-rä と知れる。

[22] OY $po_1$【秀】として犬飼（2008: 128-133）が指摘するものと同じである。*$pò_1$【*頭】は EMJ pò【穂】，†pò【秀】（pòtùè ~ pòtùé【上枝】，pòtùmákúní【秀真国】）へと意味拡張を遂げる（cf. 英 *head*【頭->上座】; 西 *cabeza*【頭->穂】）。

[23] OY ではもっぱら $woto_2ko_1$ であるが，古語を多用し（大野 1982: 195-202）モ甲乙を保存する（稲岡 1976）保守的な言語体系で知られる山上憶良歌に二重語 $woto_1ko_1$〈遠刀古〉（万 5-804）が見られることから，第二音節が甲類相当に遡りうる。

[24] LMJ toboke-【惚ける】，PTw *totoke-【溶ける】（≍ †to + OY $to_2ke_2$-【溶ける】），出雲 tosjabar-【憑依する】（≍ †to + EMJ sapar-【障る】）など【狂気】関連の動詞の化石的な †to- も同源であり，OY $to_2$【跡】と同源である（cf. 註 24, 25）。

[25] 現代語「心ここにあらず」・独 *nicht bei* $sich_3$ *sein*【正気を失った; lit. 自分のところに居ない】などを見るに，EMJ $^{B}$poke-【呆ける】，LMJ fo:ke-【id】などの【恍惚】や【耄碌】に関連する動詞は EMJ pòká【他】と同源の名詞類を不明な接尾辞 *-i により動詞化したものと分析しうる。EMJ pòká の後部要素 -ka は伝統的に場所の接尾辞であると想定されるため，白鳥（forthcoming）に基づけば前部要素は舌根後縮性母音であり，6VH *$po_1$ka が再建される。

[26] 【（傷）跡】【傷】の多義性の事例として英 *scar* などがある。*tä【跡】に【傷】の意味が存在した証拠として，秋田県鹿角郡 toQcuri【傷痕，皮膚の引連れ】（≍ EMJ tur-【吊る】）がある。本報告は多義性を述べるのみにし原義は論じない。

[27] 【傷->汚名】の意味拡張の事例として EMJ kegare- がある（西宮 1988）。LMJ kiki-tore-【聞き入る】，LMJ mi-tore-【見入る】

(12) pIk *jorukob-【喜ぶ】< *$jo_2r$[28]-$o_1$#[29]$ko_1Np[o_1]i$[30]-【良い-RT#*生える；喜ぶ】

(13) pIk *k[ou]ri【氷】<- *†kour- < *$ko_2$[31]-$pu_2r$-【*凝り>*霜-降る；*霜が降る>凍る[32]】

(14) pIk *h[ou] < *$po_2$-$po_1$【*頬[33]-頭[34]；頬】

## 5　さいごに

本報告では，外群に属する変種を参照する上からの再建（reconstruction from above）と内的再建によって先壱岐語（pIk）を再建し，先壱岐語と中央文献系変種の母音対応Ⅱのうち顕著な数が有坂・池上法則の例外 *$o_2$${$o_1$, $u_2$}, *$o_1$$$o_1$$ä によって説明できることを示した。

母音対応Ⅱに類似した音対応は，壱岐語ほど多くない様だが，近代肥筑語において広く共有される。これは，肥筑祖語において有坂の第一則と第二則が中央文献系変種とは異なるかたちで形成されたことを暗示する。今後の歴史言語学的研究が必要である。

表 5. 各地の肥筑語における母音対応Ⅱ

| | pIk | 佐世保[35] | 熊本県各地 | 佐賀[36] | 久留米[37] | 柳川 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 【多い】 | *[ou]- | (u:ki-) | †u:-[38] | uu-ka | †u:- | *uuka*[39] |
| 【頬】 | *h[ou] | — | †hu:[40] | beNpuu<br>†huu | — | *benpu*[41] |
| 【目覚める】 | *ozum- | ozum- | o{s, z}um-[42] | ozum- | ozum- | (*ozom-*)[43] |

の化石的な †tore-【熱中する】は，【怠け者】などを意味する日本諸語の名詞 toro～doro の祖先 *tä-rä【汚名-概地点；馬鹿者】の不明な接尾辞 *-i による動詞化である。*tä の【汚名】の意味の存在はこの *tä-rä から推測される。

[28] 動詞 *$jo_2r$- は OY $jo_2$rasi-～$jo_2ro_2$si-【好ましい】に化石的にみられる。一般に動詞類語根は所謂「シク活用」を派生し，かつ形容詞化接尾辞 *-Asi-の舌根調和に類推的水平化に由来する可能性のある a～$o_2$ の乱れがあるため，動詞類語根 √$jo_2r$- の存在が示唆される。EMJ tujor-【強くなる】が関連する可能性もあるが，これには jowar- といった例もあり，また不必要に形態素を分解することは好ましくないため（尹熙洙 2025 p.c.），尚，検討を要する（河合翼 2025 p.c.）。

[29] 伊予大三島肥海 jorikob-【喜ぶ】（藤原 1988: 837）は所謂「連体形」でなく「連用形」型の脱動詞名詞化とみられるため，日琉祖語がこの語の univerbation を経験するよりも前の言語であったことを暗示する。

[30] LOJ $ko_1$bi-【媚びる】（新撰字鏡〈古夫〉）より *$o_1$. LMJ kobi-【古びる】は，【*生える->*育つ】を経由した意味拡張の結果である（cf. 英 *grow* など）。ENJ kobi-tuk-～kobiri-tuk-【くっつく-付く；こびり付く】の前部要素は，【*生える->*固着する】を経由した意味拡張の結果である。EMJ ᴬkobi-【媚びる】は，【*固着する->くっつく】を経由した意味拡張の結果と見られる（cf. 英 *cling*【くっつく->甘ったれる】）。*ᴬkoNpoi の語根は重複により所謂「擬態語」を派生し，新潟県西頸城郡 kobo~kobo【人の言なりになって機嫌を取るさま】，富山県砺波 kobo~kobo【野菜の苗などが密集して生えるさま】に反映する。

[31] EMJ **ko**gor-【冷え固まる】，**ko**goye-【凍える】は，EMJ ᴬkor-【固まる】や EMJ koye-【凍える】の祖形の前部の不完全重複乃至は不明な接頭辞 †ko- の付加に由来する。OY $ko_2$r-【固まる】（華厳経音義私記〈己礼利〉）が後者の語源における不明な接頭辞 †ko- を動詞語根として含むものであるとすれば *$ko_2$-【凝り】が再建される。

[32] Cf. 仏 *gelée*【霜，煮凝り，ゲル状の物質】。近代的な語彙であるが英 frosted の【霜が降った->急速冷凍された】。

[33] 中古語の一拍名詞の重複形は式と無関係に HL のテンプレートを示す（秋永 1972: 402-403）。然しこれは高起語への類推的水平化による可能性があり，tì~tí【父】，pà~pá【母】等から或種の低起語の畳語には *LH のテンプレートを再建できるかもしれない（加茂周 2022 p.c.）。EMJ の【頬】の音調は pòpó（和名抄）と pòpò（名義抄）で揺れるが，前者が畳語 *$po_2$~$po_2$，後者が複合語 *$pò_2$ -$pò_1$（複合語アクセント規則は五十嵐 2022 を敷衍）に由来するとみれば，この二重語を説明しうる。

[34] Cf. 註 17. 尚 EMJ kápó【顔】は白鳥（forthcoming）が比較方法（PTw *kawa【顔】, pSO *kawa【id】）と内的再建（EMJ kapa-paju-）により *kapo【顔】と再建するため 6VH *$kapo_1$ である。四声仮説により *ká(j)-$pò_1$【毛-*頭】と分析できる。

[35] 【大きい】の意味で ouki-ka, oukina-ka, ouke:（佐世保市 1919: 81）が存在する。ozum-（ibid: 83）。

[36] uu-ka（佐賀県教育会編 1975: 13）。beNpuu（ibid: 127）；対馬 beNpoo【頬】と対応するため，母音対応IIの事例とみる。Cf. 註 43. †huu は複合形式 hu:taN, hu:taNbira に見られる（ibid: 121）。ozum-（ibid: 21）；ほか ozumakas-【目覚めさせる】も。

[37] 久留米 u:mizu【洪水】（林田 1977: 70）。ozum-（ibid: 70）；ただし ozom- が優勢。

[38] 熊本県全域 u:mizu【洪水】（田中 1942: 140）。uubaNgjaa【いい加減】（関東にしはら会 2025: 10）。

[39] u:nigie【（行事名）】，u:magari【（地名）】，u:jajasaN【大きな赤ちゃん】（松石 1985: 51）。柳川 uuka（松岡 2025: yng296）。

[40] 天八球葦上阿などの多数の複合形式（田中 1942: 203）に含まれる。

[41] 柳川 benpu（松岡 2025: yng40）。前部は EMJ biN【頭の左右側面の毛】。【頬】に多出する接辞 -beta との混淆もあるか。

[42] 関東にしはら会（2025: 12）。

[43] 柳川 neozom-【目覚め起出す】（松石 1985: 116）, ozomakas-【目覚めさせる】（ibid: 57）。柳川 ozom-（松岡 2025: yng524）。

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 【重い】 | *obu(ta)- | omu-[44] | omu-[45] | — | — | *obuka*[46] |

最後に本報告の位置付について述べて擱筆する。第一に，本報告の肥筑壱岐，平子（2024）の出雲仁多，白鳥（2024a）の周防大島，白鳥（forthcoming）の高縄などを始めとして，日本諸語には，恐らくこれ以上の数の，日琉祖語の音韻論的再建にとって重要な特徴を保存する未知の「方言」が現存する。多くは通時的に研究されず，十分な記述すらもないままに深刻な消滅の危機にあるとみられ，一部は既に明治以来の言語接触によって消滅した可能性もある。第二に，肥筑壱岐語における本報告が示した音韻対応を示す語彙は極めて多く，機能語にも現れる。肥筑壱岐語には所謂「中二段動詞（middle bigrade）」が知られ（五十嵐 2024），本報告が議論したもの以外にも，未だ議論のない興味深い特徴がある。肥筑壱岐語が中央文献系変種による言語交替を経験したと想定する旧説は徐々に反証される蓋然性が大きい。第三に，本報告の議論する母音対応は，白鳥（2024b）による有坂・池上法則の解体構想を支持する証拠で，日琉祖語の従来の母音体系の改訂の必要を意味する。以上について調査・考究を要する。

※グロスと略語は註 9 も参照。

引用文献

※特記なき場合はすべて，日本諸語の語彙なら方大辞，中央文献系変種の語彙なら日国大，アクセントは秋永ほか（1997）に拠る。


秋永一枝・佐藤 栄作・坂本清恵・鈴木豊・上野和昭（1997），『日本語アクセント史総合資料 索引編』，東京：東京堂出版.

秋永一枝（1975）.『古今和歌集声点本の研究　資料篇　上』. 東京：校倉書房.

有坂秀世（1955）.『上代音韻攷：故有坂秀世博士遺稿』. 東京：三省堂.

藤原与一（1988）.『瀬戸内海方言辞典』. 東京：東京堂.

福田良輔（1965）.『奈良時代東国方言の研究』. 東京：風間書房.

林田栄美（1977）.「久留米藩境における言語境界線 その 5」，九州大谷短期大学国文学科（編）『久留米方言の実態』，久留米：久留米郷土研究会.

早田輝洋（2017[2008]），「母音調和」，『上代日本語の音韻』. 東京：岩波書店.

平子達也（2024）.「出雲仁多方言における母音をめぐる音変化」.『言語研究』165.

平 ＝ 平山輝男（1951）.「壱岐対馬両方言の音調に就いて」『音声の研究』7.

補 ＝ 山口麻太郎（1975c）「補遺壱岐島方言集」『山口麻太郎著作集 2 方言と諺篇』. 東京:佼成出版社.

方大辞 ＝ 佐藤亮一・小学館辞典編集部・徳川宗賢（1989）『日本方言大辞典』全二巻＋別巻（電子版），東京：小学館.

五十嵐陽介（2021）.「分岐学的手法に基づいた日琉諸語の系統分類の試み」.『フィールドと文献から探る日琉諸語の系統と歴史』. 東京：開拓社.

五十嵐陽介（2022）.「琉球語・八丈語以外の非中央語系ジャポニック諸語の系統」. 言語系統樹ワークショップ. 2022 年 12 月 25 日沖縄県立博物館・美術館（オンライン併用）.

五十嵐陽介（2023）.「日琉祖語四声仮説：最少の声調と最少の音変化でアクセント体系の多様性を説明するために」. 第 4 回プロトジャポニック研究会.


[44] このほか obu-i, omo-ka もあり（佐世保 1919: 81）。

[45] 関東にしはら会（2025: 13）

[46] 柳川 obuka 松岡（2025: yng201）。

五十嵐陽介（2024）.「現代九州諸方言における旧上二段動詞の「下二段化」は九州・琉球祖語仮説を支持するか？」.『言語研究』163.
Igarashi, Yosuke (2025) Tracing Japonic Lineages through Matryoshka Distribution. *Journal for Japanese Studies* 15.
池上禎造（1932）.「古事記に於ける假名「毛・母」に就いて」,『國語國文』2 (10): 1224–25.
稲岡耕二（1976）.『萬葉表記論』, 東京：塙書房.
犬飼隆（2005）.『上代文字言語の研究』. 東京：笠間書院.
関東にしはら会（2025）.『熊本西原語辞典　第二版』. 西原村. https://www.vill.nishihara.kumamoto.jp/kiji0031600/index.html.
き ＝ 鳥巣修（2019）.『きーちみ しゃべっちみ 壱岐島の方言事例集』. 長崎:ゆるり書房.
松石安兵衛（1985）.『柳川方言：知っとり召すかんも』. 柳川：柳川商工会議所.
松岡葵（2025）.「柳川」. CARLINO Salvatore (2022-2025) 「日琉諸語オンライン辞書」 http://odjl.net (2025 年 3 月更新版).
日国大 ＝ 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編（2000—2002）,『日本国語大辞典』13 巻＋別巻（電子版）, 東京：小学館.
西宮一民（1988）.「ケガレの語源」.『皇學館大學神道研究所紀要』4.
大野晋（1982）.『仮名遣と上代語』, 東京：岩波書店.
Pellard, Thomas (2015). The linguistic archeology of the Ryukyu Islands. In: Patrick Heinrich/Shinsho Miyara/Michinori Shimoji (eds.) *Handbook of the Ryukyuan languages: History, structure, and use*. Berlin; Boston: De Gruyter Mouton.
ペラール, トマ（2021）.「日琉諸語の系統分類と分岐について」.『フィールドと文献から探る日琉諸語の系統と歴史』. 東京：開拓社.
Pellard, Thomas (2024) Ryukyuan and the reconstruction of proto-Japanese-Ryukyuan. In: Bjarke Frellesvig/Satoshi Kinsui (eds.) *Handbook of historical Japanese linguistics*. Boston/Berlin: De Gruyter Mouton.
白鳥詩織（2024a）.「周防大島祖語における有坂の第三則の例外」. 日本歴史言語学会 2024 年大会口頭発表資料.
白鳥詩織（2024b）.「有坂・池上法則の新解釈」.『歴史言語学』13.
白鳥詩織（forthcoming）.「日琉祖語の第八母音の提唱」. 日本歴史言語学会 2025 年大会.
白鳥詩織（in review）.「有坂の第三則の新解釈」.『歴史言語学』
佐世保市（1919）.『佐世保郷土誌』. 佐世保：佐世保市.
テ ＝ 山口麻太郎（1975d）「壱岐島テェモン集」『山口麻太郎著作集 2 方言と諺篇』. 東京:佼成出版社.
上野善道（2006）.「日本語アクセントの再建」.『言語研究』130.
山口麻太郎（1975a）「壱岐島方言集」『山口麻太郎著作集 2 方言と諺篇』. 東京:佼成出版社.
山口佳紀（1985）,『古代日本語文法の成立の研究』, 東京：有精堂出版.
続 ＝ 山口麻太郎（1975b）「続壱岐島方言集」『山口麻太郎著作集 2 方言と諺篇』. 東京:佼成出版社.

謝辞

松岡葵さんからの 2024 年 8 月の私信によって拙論の研究対象の探索が容易になりました。また河合翼さんと尹熙洙さんからの示唆によって語源分析が深められました。和田有梧さん，天川さんのご助言により構成が改善されました。ここに記して感謝します。

# 自治体アンテナショップの商品における方言使用
## ―言語的・地域的・商品分類別傾向―

発表者 田﨑璃音[1]

## 1 はじめに

現代社会において、グローバル化や共通語の普及に伴い、各地域の方言衰退が進んでいることが課題とされている。その課題は、方言が地域の文化・価値観を保存する言語資源としての意義、地域社会における方言継承・アイデンティティの維持、さらに産業・観光における活用といった、複数の側面から顕在化している。田中（2011）では、方言に対する意識変容について、標準語の登場によって方言撲滅運動が盛んになったが、転換点となる時期を境に方言を保存しようとする動きが強まり、方言のツール化やアクセサリー化が起こったと整理されている。ここでいう「ツール化・アクセサリー化」とは、方言がいわば実用的・装飾的資源として社会に活用される過程を指す。この枠組みを踏まえ、井上は「方言の経済価値」に着目し、「経済言語学」という概念を提唱した。これまでに、方言を使用した広告に関する研究（竹内 2017）、ネーミングに関する研究（益子 2020）、お土産に関する研究（井上 2011）などが行われてきたが、他の累積方言研究と比較するとまだ例が少なく、十分に検討がなされたとはいえない。また、具体的な方言使用製品を都道府県ごとに同様の条件で調査および類型化した研究は、存在しないといっても過言ではない。そこで本研究では、都道府県別に方言使用製品の分布を把握するため、調査の場として東京都内のアンテナショップを選定した。アンテナショップは、購入者・販売者が特定の地域に偏りにくく、かつ地元消費財から土産品までを横断的に販売していることから、地域および商品構成の偏りを抑えたデータ収集が期待できると判断した。本研究の目的が明らかにされることで、方言の経済的利用の現状把握につながり、結果としてアンテナショップや地方自治体、企業にとって方言の価値や利用可能性についての示唆を与えられるだろう。

## 2 背景

Chambers and Trudgill（1998 筆者訳）は、方言の定義として、ある二つの言語において、互いにある程度の理解が可能であれば、それらは同一言語における方言（バリエーション）であると記述した。

先述した方言に対する意識変容の流れの中で、方言の実用的・装飾的資源としての活用に関する研究として、小林（2004）と、田中（2011）がある。小林（2004）は現代方言の主な機能が、思考や概念の伝達ではなく、心理的なメッセージの提示に遷移してきていると指摘した。共通語の骨組みに、方言による文末詞や感情語彙、程度副詞といった心的な要素を交えた会話が若者の間で成り立っており、共通語に方言がちりばめられている様相を「アクセサリー化」と名付けた。また田中（2011）は、方言のアクセサリー化が地域に縛られずより大衆化した概念として、「方言コスプレ」を提唱した。これは、話し手が本来身につけている出生・生育地の方言にかかわらず、日本語社会で生活する人々の中にあるイメージ上の方言を、まるでコスチューム・プレイのように使用することである。方言コスプレによって、話者は親密な間柄やくだけた場面における、心理的要素の演出や感情の伝達を試みる。

製品に対する方言使用の研究として、日高（1991）では、宮崎県内の土産物店や商店を対象に、方言みやげに使用されている方言の品詞や使用頻度について調査した。また井上（2011）では、全国で収集した方言みやげの地域別分類を行い、「国土の端（九州、山陰、東北）」と、「中央（近畿）」に方言みや

[1] たさき　りおん（東京海洋大学大学院生）m257014@edu.kaiyodai.ac.jp

げが集中していることを指摘した。この地域は住民の方言に対する情的プラス評価が高い地域となっており、方言への愛着心が方言産業の基盤をなしている。さらに井上（2023）では、これまでの分類に加えて、商品別の分類も含めた研究が行われている。

これまでの方言研究では、方言の心理効果を狙った広告や看板に関する研究や、方言ネーミング・方言みやげに関する研究は既に存在する。しかし従来の研究では、全国規模での具体的な製品に対する方言使用の実態把握や分析はおこなわれてこなかった。

本研究が対象とする都内アンテナショップは、購入者・販売者の地域的偏りが小さく、品揃えも土産品に限定されない。地元住民向けの商品に加え、運営者側が関東の消費者を想定して選定した商品も並ぶ。こうした、購入者・販売者が特定の地域に限定されず、商品選定基準が全国流通に近い、いわば“ニュートラル”な場における方言使用製品の調査は、言語学の先行研究には見当たらない。

また都内アンテナショップという、購入者・販売者ともに特定の地域に偏りがなく、加えて「お土産」に限定されることなく地元住民が購入する商品もあれば、アンテナショップの経営側が関東の消費者に向けて選定した商品もある、いわばニュートラルな場での方言製品調査は、言語学の観点では行われたことがない。さらに調査の実現可能性を鑑みた際に、都内に 47 都道府県のうち約 8 割が存在しているアンテナショップは、調査の場として最適であると考えた。

なお本研究において、琉球諸語については、ハインリッヒ（2017）より、琉球諸語が独立した言語として存在した期間が非常に長く、また言語システムが日本語と異なること、加えて日本語との接触以降に発生したウチナーヤマトゥグチを除くと、琉球諸語と日本語の間にはグラデーション的な言葉が存在しないことから除外した。またアイヌ語は北原（2011）より、各言語からの借用語彙はあるものの、いずれの言語とも系統関係が認められていないため、併せて除外した。

## ３ 本研究の目的と仮説

本研究の目的は、以下の二点である。

・製品パッケージにおける方言使用の実態（地域的偏在、品詞・商品分類等の傾向）を明らかにすること。

・これらのデータを累積研究と照合し、方言活用の現状の位置付けを行うこと。

本研究における研究目的を達成するため、以下の課題を設定した。

・方言研究および方言に関する言語景観や製品の文献調査

・アンテナショップ各店舗への事前調査

・アンテナショップ各店舗での現地調査

## ４ 事前調査の概要と結果

アンテナショップの経営状況を知るための事前調査として、自治体アンテナショップ実態調査報告を参考とした聞き取り調査を行なった。実態調査報告は、一般財団法人地域活性化センターが毎年行っており、年間総売上額や運営主体、店舗設置目的、店舗 PR 方法といった総合的な項目となっている。聞き取り調査はメールを用いて、店舗内の総商品数／売り場面積／昨年度の来店者数の三項目について質問した。

来店者数が最も多かった店舗は栃木県アンテナショップであり、北海道、広島県と続く。また最も売り場面積が広い店舗は奈良県アンテナショップであり、岩手県、福井県、長崎県、福島県と続く。本研

究で方言使用製品割合を算出するために用いた店舗内総商品数は、多い順に、奈良県（約 3000 点）、広島県・鳥取県岡山県合同ショップ・福島県（約 2500 点）、長崎県・福井県（約 2000 点）となっていた。

## ５ 本調査の概要と結果

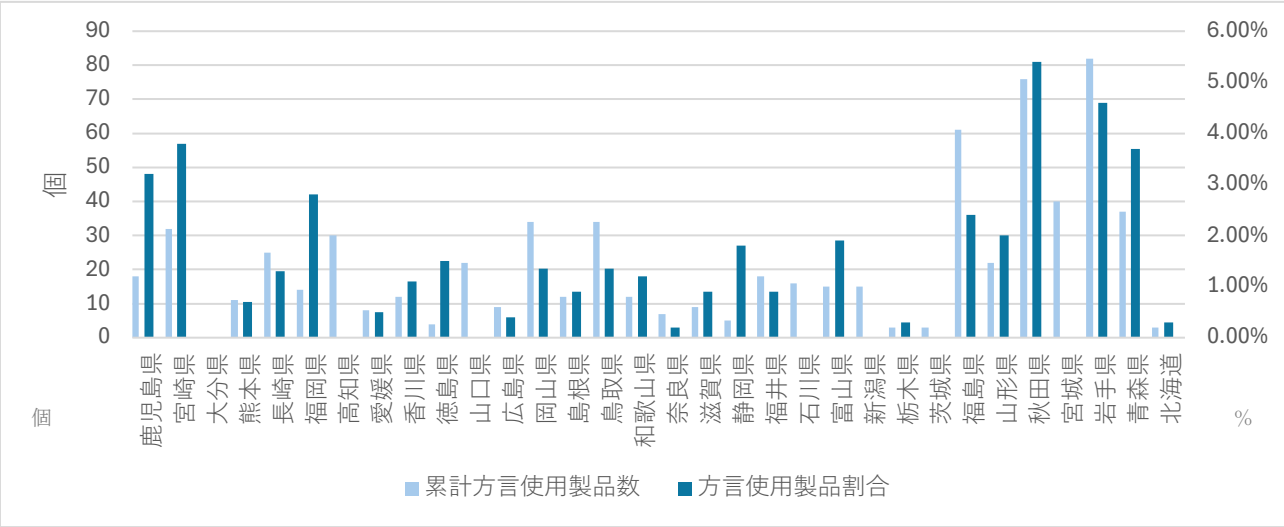
調査は 2024 年 5 月から同年 12 月の期間に、都内アンテナショップで行った。パッケージに方言が使用されている商品を全て撮影し、方言が使われている商品について、〈都道府県・都道府県コード・製品区分・商品名・使用されている言葉・言葉の意味・品詞・税込価格〉ごとの情報を整理した。また、調査対象製品の基準として、①商品の名称自体が方言であること（例:おきゅうと）②商品の名称に方言の影響が見られること（例:いぶりにんじん）③パッケージデザインに方言が使用されていること（例:飲みやぁー）という三点を設定した。なお、同一の方言が使用されている商品については、種類が複数ある場合は異なるデータとして、個数や梱包が複数ある場合は同一製品とみなし同じデータとして扱った。なお、今回収集する方言は、インターネット上で閲覧が可能である国語辞典「weblio 国語辞典」に載っていないことを条件とした。

本研究では、商品分類に総務省の「日本標準商品分類」を採用し、品目ごとに 3〜5 桁の分類コードを付与した。品詞分類は『日本国語大辞典』の区分に準拠する。なお、店頭調査では長文や複数語の混在などにより語単位の抽出が困難な事例が一定数みられたため、補助的に「文章」「アソート」の独自項目を設定した。併せて、伝統料理や地域の祭りといった固有名詞の扱いを明確にするため、「固有名詞」「固有名詞の一部使用」の項目を追加した。

（表１）方言使用製品における言語側面の分類

| | |
|---|---|
| 1　名詞 | 13　接尾語 |
| 2　代名詞 | 14　造語要素 |
| 3　動詞 | 15　漢字要素 |
| 4　形容詞 | 16　連語 |
| 5　形容動詞 | 17　枕詞 |
| 6　副詞 | |
| 7　連体詞 | a　固有名詞 |
| 8　接続詞 | b　文章 |
| 9　感動詞 | c　アソート |
| 10　助詞 | d　固有名詞の一部使用 |
| 11　助動詞 | |
| 12　接頭語 | |

結果として、689 点の方言使用製品が集まった。各都道府県の累積方言使用数および方言使用製品割合は図 1 のとおりである。




（図 1）各店舗の方言使用製品数（累積）および方言使用製品割合
本調査をもとに筆者が作成

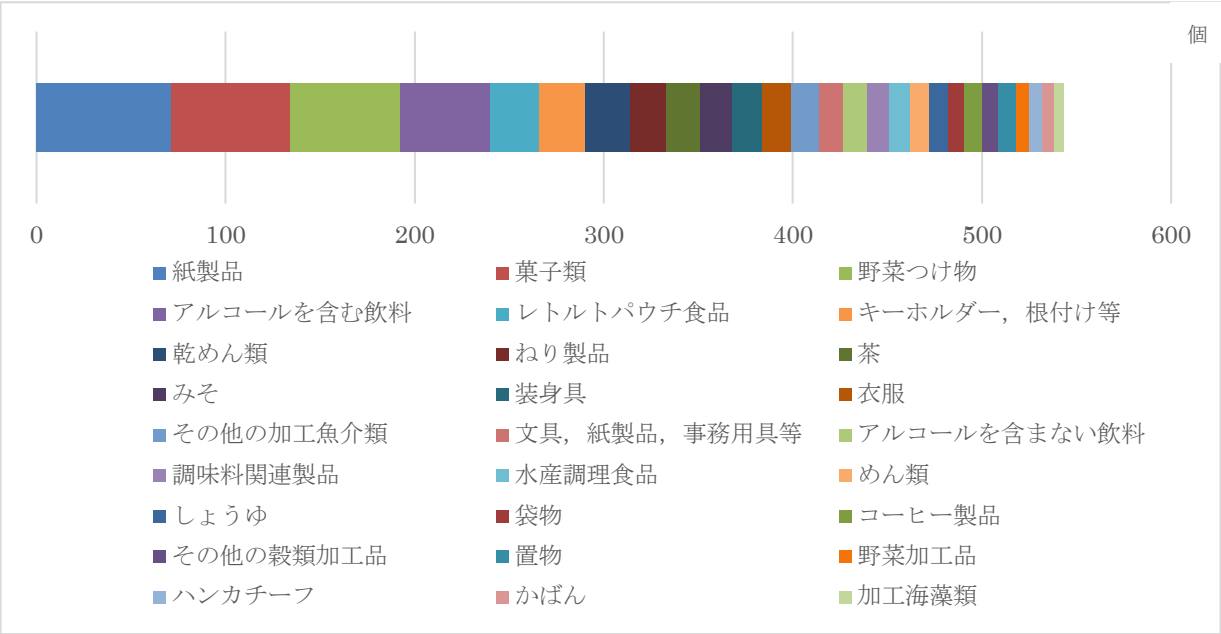
累計方言使用製品数は東北地方が特筆して多い。その次に製品数が多い九州地方では、鹿児島県と宮崎県が特に目立っていた。方言使用製品割合においては、調査結果より、井上（2011）の先行研究が示す結果とほぼ同様の結果が得られた。九州地方および東北地方で方言使用製品が特に多くみられ、次に近畿および四国地方が続く。

方言使用製品における方言種類数も、東北地方の数の多さが顕著であった。鹿児島県、熊本県、福岡県、愛媛県、香川県、徳島県といった、ある程度まとまった地域で二つの図の数値差が小さいことがわかる。したがって、九州地方および四国地方では同一方言の繰り返し使用が少なく、とくに九州地方は方言使用製品割合も大きいため、店舗内の方言多様性に富んでいるといえるであろう。

製品に使用される品詞の分類は、名詞が非常に多く、次いで固有名詞、助詞となっており、日高（1991）の先行研究から多いと予想された副詞は比較的少なかった。動詞と形容詞は西日本に多く、特に九州の店舗において「うまか」という方言がよくみられた。固有名詞および固有名詞の一部使用は東北・北陸に多い。調査においては、伝統的な漬物や調味料が特に多かった。文章は中国・四国に多くみられる。高知県は文章表現の使用が特に多く（例:こじゃんとはちみつ入れたき～)、菓子類やレトルトパウチ食品に使用されており、調査した全ての都道府県を見ても使用製品数が突出していた。

（図 2）高知県の文章表現の例
筆者撮影

次に、日本標準商品分類に基づく分類をおこなった。結果は図 2 のグラフである。




（図 3）日本標準商品分類にもとづいた分類（上位 27 品目）
本調査をもとに筆者が作成

分類は全部で 113 項目となった。製品数が 1～4 点の項目（例:清涼飲料、素干いわし、娯楽装置及び玩具、その他の調理食品　等）が約 75%を占めていたため、製品数が計 5 点を超える項目のみをグラフにした。対象は全部で 27 項目であったが、その製品数は計 543 点であり、これは全体の約 80%を占める。したがって、グラフに記載されている項目に製品数が偏っていることがわかる。

## ６ 考察

事前調査および本調査の結果から、井上（2011）の先行研究と同様に九州地方および東北地方で方言形式が特に多く、また近畿・四国でも多く使用されていることがわかった。井上（2011）がおこなった方言みやげの都道府県別製品数の調査では純粋な商品数を記録しているため、店舗の面積や商品点数等、収集の限界がある。今回の事前調査では、全店舗から回答を得られなかったが、総商品数における方言使用製品の割合を算出しているため、比較的データの信用性が高い。特筆すべきは、他の地域に比べて東北地方の方言使用製品割合が非常に多くなっている点である。また井上の研究では、国土の端と中央（近畿）に方言みやげが多く分布する「真ん中が高くなった灰皿」（井上 2011:149）のようなグラフになるとしていたが、本研究では国土の端のみが多く分布している。これは井上の研究で方言使用製品数が顕著であった京都府と大阪府が、都内にアンテナショップを出店していないため、本研究には含まれていないことに起因すると考えられる。

一方で、方言使用製品の割合が少ない地域についても井上の先行研究とほぼ同様の結果となった。首都圏が特に少なく、四国・東海・甲信越・北陸がつづく。井上（2023）では、西日本における方言みやげ（九州・近畿）の多さと比較して東北北部の方言は活力を失っていると述べられているが、今回の調査ではむしろ東北での方言使用が目立った。

調査結果は近畿を除きおおよそ仮説通りとなったが、方言意識および方言イメージの側面ではどうだ

ろうか。先行研究として示した田中ほか（2016）における「2015 年全国方言意識 Web 調査」の結果、「方言が好き」と答えた地域には、東北・九州が含まれていた。また「方言が多い」と答えた地域は九州であり、東北は九州ほどの高い評価ではなかった。したがって、調査対象が不十分であった近畿地方を除き、前者の結果から方言意識が好意的である地域は今回の調査で方言使用製品が多くみられた地域と合致しているといえる。

使用されやすい方言形式として、仮説では名詞が最も多く、次に副詞、形容詞、動詞がつづくとした。最も多く使用されている品詞は名詞であり、次が固有名詞であることがわかった。これは日髙（1991）と同様の結果である。名詞および固有名詞は、方言を使用する際に活用形を考える必要がなく、また今回の調査で 33 種の例がみられた「固有名詞の一部使用（例:ちゃぐちゃぐ）」への利用も容易である。したがって本研究ならびに先行研究でも名詞の使用が最も多いことは必然である。

しかし、名詞・固有名詞以降は助詞（例:～じゃが）、形容詞（例:めんけえ）、動詞（例:いぬらー）、接尾語（例:～せんね）がつづいており、特に先行研究で挙げられていなかった助詞が多く使用されていた。この相違点は、日髙のおこなった調査が宮崎県内のみを対象としており、さらに調査対象製品は 17 種のみであったため、方言形式の偏りおよび調査対象の母数が少なかったことに由来すると推測される。

また、地域ごとに使用する品詞に特徴があることも明らかとなった。特に東北・北陸の固有名詞および固有名詞の一部使用の多さについては、伝統的な加工製品の製品名が方言由来であったり（例:いぶりがっこ）、元の名称が長い時間をかけて訛っていったりする傾向（例:ずんだん餅）があることに起因していた。また高知県の文章表現の多さについては、明確な理由を明らかにすることはできなかったが、先行研究で指摘されたことは一度もなく、新たに判明した事実である。

図 3 より、紙製品、菓子類、野菜つけ物、アルコールを含む飲料において、特に多くの方言使用製品がみられることがわかる。それぞれの使用傾向として、以下の項目が挙げられる。

- 紙製品：ポチ袋やふせん、メモ帳、シール等、方言を掲載しやすい下地となっていた。方言を話すキャラクターや方言のメッセージが描かれた製品が特に多くみられる。製品によっては裏面に方言の解説が掲載されていた。
- 菓子類：さまざまな品詞が使用されており、調査対象製品の基準として設けた 3 項目が幅広く適用されていた。4 つの分類の中で最も自由度が高いといえるであろう。
- 野菜つけ物：野菜つけ物は特に固有名詞の使用が目立った（例:どべっこ漬け、ぺそら漬け）。その地域で伝統的に作られてきたつけ物を販売しているため、新たに命名する必要がない。東北地方のアンテナショップでは、「いぶり」と「がっこ」を独立させて流用している例が多くみられた。
- アルコールを含む飲料：パッケージへの方言使用例もあったが、方言のひと単語を商品名にし、パッケージの中央に大きく掲載する製品（例:だいやめ）が主にみられた。他の商品と比較すると、方言が目立ち、目を引くパッケージの商品が多い。

以上、上位４つの分類だけでも明確な傾向が確認できた。あらかじめ予想していた「方言を高頻度で使用する傾向のある商品分類」が存在するというよりは、むしろ上位数十分類が店舗内総商品の多数を占めており、残りの少数においては幅広い商品の存在が認められた。

## 7 おわりに

本研究は、製品パッケージに用いられた方言を分類し、先行研究と照合して分析した。結果として、①アンテナショップでの方言使用には地域偏在があり、とくに東北・九州で多い。背景には当該地域の方言への好意的態度がある。②用いられる品詞は名詞が最多で、作成の容易さが一因と考えられる。他品詞の傾向差は調査範囲や方言形式の違いに起因する可能性がある。③方言を使う商品分類は広範で、特定カテゴリへの集中は見られない。以上は、方言の経済的利用の現状把握に資し、アンテナショップ・自治体・企業に方言活用の示唆を与える。限界として、都内アンテナショップのみで 47 都道府県を網羅できないこと、店舗規模差により割合指標に限定されること、近畿（大阪・京都等）のデータ不足、「アソート」「文章」など一部記録の粗さが挙げられる。今後は、消費者心理への効果や企業の企画・戦略の解明へ進め、方言の経済・情緒価値を捉える研究を深化させる必要がある。

**【参考文献】**


一般財団法人地域活性化センター（2023）『令和 5 年度（2023 年度）自治体アンテナショップ実態調査報告書』.
https://www.jcrd.jp/publications/antennashop/

井上史雄（2011）『経済言語学論考－言語・方言・敬語の値打ち－』. 明治書院.

井上史雄（2023）「The Economical Effect of New Dialect as seen in Linguistic Landscape」『東京外国語大学論集』106 巻, pp.21-58.

井上史雄・木部鴨子（2016）『はじめて学ぶ方言学―ことばの多様性をとらえる 28 章―』. ミネルヴァ書房.

沖裕子（2013）「書評　経済言語学論考－言語・方言・敬語の値打ち－」『日本語の研究』第 9 巻 3 号, pp.90-95.

木部鴨子・三井はるみ・下地賀代子・盛思超・北原次郎太・山田真寛（2011）「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業報告書」. 国立国語研究所.

小林隆（2004）「アクセサリーとしての現代方言」『社会言語科学』7-1, pp.105-107.

佐藤憲正（2000）『日本国語大辞典　第二版　第一巻　凡例』. 小学館.

真田信治（2011）『日本語ライブラリー　方言学』. 朝倉書店.

総務省統計局（1990）「日本標準商品分類（平成 2 年[1990 年]6 月改訂）」.
https://www.estat.go.jp/classifications/terms/30?search_method=keyword&search_word=&komokuSearchFlg_dummy=1&komokuSearchFlg=1&info1SearchFlg_dummy=1&info1SearchFlg=1&info2SearchFlg_dummy=1&info2SearchFlg=1&info3SearchFlg_dummy=1&info3SearchFlg=1&revision=01&search_kind=30&base_code=0&form_id=main_form&op=search&searchboxShow1=1&searchboxShow2=0&searchboxShow3=0&page=&srchcndId=

竹内華奈子（2017）「広告表現における方言使用の有効性と影響について」（卒業論文　駒澤大学経営学部経営学科）.
https://www.komazawa-u.ac.jp/~knakano/NakanoSeminar/wp-content/uploads/2018/08/竹内華奈子「広告表現における方言使用の有効性と影響について」.pdf

田中ゆかり（2011）『「方言コスプレ」の時代　ニセ方言から龍馬語まで』. 岩波書店.

田中ゆかり・前田忠彦（2012）「話者分類に基づく地域類型化の試み―全国方言意識調査データを用いた潜在クラス分析による検討－」『国立国語研究所論集』第 3 号, pp.117-142.

田中 ゆかり・林直樹・前田忠彦・相澤正夫 (2016)「１万人調査からみた最新の方言・共通語意識:「2015年全国方言意識 Web 調査」の報告」『国立国語研究所論集』 11 号, pp.117-145.
田中ゆかり・前田忠彦・林直樹・相澤正夫 (2022)「1 万人を対象とした全国方言意識 Web 調査に基づく話者類型」『計量国語学』33 巻 4 号, pp.249-264.
Chambers, J. K., and P. Trudgill (1998)『Dialectology』.Cambridge: University Press.
パトリック・ハインリッヒ (2017)「近代後期日本における琉球諸語」『神田外語大学　グローバル・コミュニケーション研究所講演会報告』
https://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/labo/gci_top/activities/pdf/cl/47_report1.pdf
日高貢一郎 (1991)「宮崎における方言グッズ」『国語の研究』15 巻, pp.1-20.
日髙貢一郎 (1996)「方言の有効活用」小林隆他編 『方言の現在』. 明治書院.
益子有紗 (2020)「商標登録された「方言」」『日本大学国文学会』168 号, pp.81-88.
渡辺和博 (2018)『地方発ヒットを生む　逆算発想のものづくり「稼ぐ地方」へ脱皮しよう』. 日経 BP 社.

# ホラの用法分類の提案—『日本語諸方言コーパス』（COJADS）データをもとに—

勝又琴那[1]・加順咲帆[2]・赤間咲良[3]・佐藤未依奈[4]・山田はるか[5]

## 1. はじめに

日本語の言語形式「ホラ」の用法については、これまで多様な観点からの分類が試みられてきた（大島 2001、田窪・金水 1997 など）。しかし、従来の研究における用法分類は、共通語を対象としたものや、量的に限られた用例にもとづくものが多かった。また、後述するように、従来の用法分類では捉えきれないホラが存在する。これらの問題を解決するためには、共通語に限らず、日本語の範疇に属する言語変種をも対象とした、多数の用例の観察が必要であると考えられる。

以上をふまえて、本研究は『日本語諸方言コーパス』（以下、COJADS）における方言談話データからホラを網羅的に収集し、観察することで、ホラの新たな用法分類を提示することを目的とする。これにより、従来は十分に検討されてこなかった方言をも包括した、日本語全体におけるホラの用法分類が明らかになる。

## 2. 先行研究と未解決の問題

ホラを扱った研究は、大島（2001）、田窪・金水（1997）、劉（2015）、渋谷（2002）、琴（2016）、杉浦（2017）などがある。これらの研究におけるホラの用法は、大島（2001）をもとに、ある程度まとめることができる。

大島（2001）は、ホラを現場指示のもの、現場指示でないもの、という大きく二つの用法に分類した。このうちの前者、現場指示のものに該当するのは、(1)のようなものである。

(1) **ほら**、信号点滅よ。走って、走って
（柴門ふみ『家族の食卓 1、2』、大島 2001:37 より 下線、太字筆者）

現場指示のホラは、発話の場で、話し手が聞き手の注意を何か（(1)においては信号機）に向けるように促す際に用いられる。そして、この「何か」とは、物であったり、できごとや現象であったりするが、普通発話の場で発話の瞬間に観察可能なものであると説明される。一方、現場指示でないホラは、「何か」にあたるものが、発話の場、発話の瞬間に存在しないものである。具体的には、(2)～(4)のようなものが該当する。

(2) 敏子:ああ、それから、ベティさん、**ほら**、カルチャーセンターでいっしょだった
泰子:ああ、ベティさん
敏子:あの人とこの間偶然道で会って、そしたら、このすぐ近くに住んでるの、びっくりしちゃった
（国立国語研究所『伝えあうことばシナリオ集』、大島 2001:38 より 下線、太字筆者）

(3) M:あそこ、いいんですって。とってもきれいで。
L:うーん、でもね、高いって言うのよね。で、私たちこの間から、**ほら**、あの情報誌ね、アパートのあれ見てるんだけど、あの、みんなが高い高いって言うものだからものすごい高いのかって思ってたらそうでもないみたい。（大島 2001:39 より 下線、太字筆者）

(4) L:なかなかこの時間は集まりにくいのよね、二時半って
M:結構、**ほら**、早くご飯食べなきゃいけないでしょう
L:そう、そう、そう、そうなの（大島 2001:39 より 下線、太字筆者）

ホラが指し示す「何か」にあたるものとは、(2)では「ベティさん」という人物、(3)では情報誌、(4)では「早くご飯食べなきゃいけない」という話し手側の感覚であるが、これらはすべて、発話の場、発話の瞬間に存在しない。したがって、現場指示でないホラは(2)のように話し手と聞き手の共通の記憶の中に存在するもの、(3)のように「有名でみんなが知っているのだからあなたも当然知っているだろう」とあたかも知識が共有されているか、当然共有可能であるかのように表現するもの、(4)のように知識とは表現しにくい話し手側の感覚的なものを、当然理解共有されるであろうと表現するものとしてまとめられる。

[1] かつまた ことな（東北大学大学院生） katsumata.kotona.t1@dc.tohoku.ac.jp
[2] かじゅん さきほ（東北大学大学院生） sakiho.kajun@gmail.com
[3] あかま さくら（東北大学大学院生） akama.sakura.r1@dc.tohoku.ac.jp
[4] さとう みいな（東北大学大学院生） sato.miina.q6@dc.tohoku.ac.jp
[5] やまだ はるか（東北大学大学院生） yamada.haruka.s5@dc.tohoku.ac.jp

この大島（2001）の用法分類をもとに、冒頭にあげた先行研究の記述をまとめると、表 1 のようになる。「○」はその分類に該当する用法の記述があること、「△」はその分類に該当する用法より狭い範囲で用いられるという記述があること、空白はその分類に該当する用法の記述がないこと、「×」はその分類に該当する用法がないと明記されていることを表している。なお、枠が一括りになっているところは、その先行研究ではそれらの分類がひとまとめにされていることを示している。

**表 1　先行研究におけるホラ類の用法分類**

| ホラの分類 ＼ 先行研究 | | 大島（2001） | 田窪・金水（1997） | 劉（2015） | 渋谷(2002) ホレ | 渋谷(2002) ホリャ | 杉浦（2017） | 琴（2016） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 現場指示 | | ○ | ○ | ○ | ○ | △ | ○ | |
| 現場指示でない | 話し手と聞き手の共通の記憶の中に存在する知識を指示するもの | ○ | ○ | | ○ | △ | ○ | ○ |
| | あたかも知識が共有されているか、当然共有可能であるかのように表現するもの | ○ | | | × | | | ○ |
| | 話し手側の感覚的なものを当然理解共有されるであろうものとして表現するもの | ○ | | | | | | |
| 時間稼ぎ | | | | | | | ○ | |

以上がホラに関する先行研究の概観であるが、これらにはいくつかの未解決の問題が残されている。そのひとつが、調査対象となるホラがある特定の地域におけるものであったり（渋谷 2002、琴 2016）、ある特定の場面に現れるものであったり（劉 2015）と、特定の地域や場面のものに限られていたことである。一部、COJADS を用いて全国のホラに相当する形式を対象に調査を行った研究もある（杉浦 2017）が、ホラ以外の形式[6]も調査対象としているため、ホラそのものに関する記述は十分ではない。そしてなにより、COJADS には、大島（2001）の用法分類でも捉えきれないホラがある。

(5) B コエズ　コノ　マエノ　ウジワ　ナンボダイナ　ナンネンコロダイナ　タデダノネ　（中略）
B こいつ　この　前の　家は　いくらだろうな　何年頃だろうな　建てたのね　（中略）

B ゴーログノ　X5 テ　オラド　エドゴダゲントモ　ソノ　シトノ　コｎドモノ　**ホレ**。
B 郷六　X5 って　俺と　いとこだけれども　その　人の　子供の　**ほら**。

（A ン　ン。）　B テース　キテ　タデデ　ケダンデガネ。　エー。（A アー　ソスカ。）
（A うん　うん。）　B 亭主［が］　来て　建てて　くれたのだね。　ええ。（A あー　そうですか。）
（宮城県仙台市、4c_002、8400）

(5)におけるホレ[7]は「B の旧居を建てた大工の素性」を指し示すと考えられるが、まず、これは発話時に観察可能なものではない。そして、「B の旧居を建てた大工の素性」に関する知識を聞き手は有しておらず、誰もが知っているほど有名なものや話し手の感覚的なものでもない。すると、(5)は(1)～(4)のどれとも類似せず、大島（2001）における用法分類では捉えきれないものであると考えられる。

以上をふまえ、本研究は COJADS データから日本全国のホラを収集し、調査・分析を行うことで、大島(2001)を中心とした先行研究の記述を見直しながら、新たなホラの用法分類を提案することを目的とする。

## 3. 調査概要

本研究では、方言の談話データとして『日本語諸方言コーパス』(Corpus of Japanese Dialects:COJADS)を利用する。COJADS の元データは、文化庁が 1977 年度から 1985 年度にかけて行った「各地方言収集緊急調査」の調査データ(全国 47 都道府県の 200 地点あまりにおける、約 2500 時間の方言談話)である。COJADS は 2016 年以降、国立国語研究所の共同研究プロジェクトによって元データの整備が進められており、2025 年 9 月現在公開されている Ver.2025.03 では、全国 47 都道府県 66 地点、約 105 時間分のデータを利用できる。

[6] 本研究では除外とする「メーデ」「キャー」など、ホラとは形態が著しく異なる形式。
[7] 本研究では、COJADS 上で出現環境の違いなどがみられないことから同様の意味を持つと判断し、ホレをホラの異形態として扱う。

談話のジャンルは、2 人以上の話者による「自然談話」のほか、「道案内」「買い物」などの場面を設定した「場面設定」、調査地に伝わる民話を主に 1 人の話者が語った「語り」の 3 つがある（以上、COJADS の HP より）。

本研究の対象形式「ホラ」（異形態である「ホレ」も含む）は、COJADS(Ver.2025.03)において、短単位検索でキーを「「タグが F(フィラー)」AND「語彙素読み」が「ホラ」」と検索することで収集した。その結果、得られた 1559 件のうち、本研究では出現形態が「ホラ」（671 件）と「ホレ」（458 件）、計 1129 件を対象とする。尚、残り 430 件は語彙素読みが「ホラ」だが、「メーデ」「キャー」など出現形態が著しく異なるため、分析の対象外とする。以降、「ホラ」「ホレ」について総括して“ホラ”として表記する。

これらの用例を観察し、先行研究における既存の用法と対照する。それにより既存の用法と一致するもの、しないものの関連性を検討し整理することで、より総括的な“ホラ”の用法分類を行う。

## 4. “ホラ”の用法分類

まず、ホラは指示詞「ソレ」の派生形である（田窪・金水 1997:270）。このことから“ホラ”の用法にはすべて、あるモノ・コトを指し示し、それに聞き手の注意を向ける要素（「注意喚起」）があると思われる。そして、第 3 節の手法で得られた用例を精査することで“ホラ”は「注意喚起」の対象が何であるか、またその注意喚起の対象を示す場の諸条件、「その場で観察可能な行動を促す」「聞き手と焦点内容（“ホラ”が注意喚起する対象）を共有している」「話し手が焦点内容を言葉にして共有できる」「聞き手が焦点内容を文脈から予見できる」によって、用法が区別され、その結果、5 つの用法として使用されることがわかった。次節より各用法について例証する。尚、以降の用例では、方言をカタカナ文で、共通語訳を漢字仮名交じり文で示し、“ホラ”には太字と下線を付す。また、()で括られた発話は“ホラ”を使用する話者以外の発話、アルファベットは話者の区別を示す。

### 4.1. 用法 a

まず、注意喚起の対象がモノ・コトであり、「その場で観察可能な行動を促す」という条件を持つものが用法 a である。以下、(6)(7)(8)が該当する用例である。

(6)A アメデ スッカリ ビショビショ。 デ モー ナンダ ハダジバンマデ ヌレチャッタヨ オイ。
A 雨で すっかり びしょびしょ。 で もう なんだ 肌じゅばんまで ぬれてしまったよ おい。

(B マー タイヘンデシタネ。ドノクライ ツレマシタカ。）A **ホーラ** ミテミロ。コノ ビク ン ナカオ
(B まあ 大変でしたね。 どのくらい 釣れましたか。）A **ほら** 見てみろ。この びく の中を

オマエ。 コンナニ アラー オマエ。カゾエキレヤー シネー。（B マー タクサンデスネー。）
お前。 こんなに あるよ お前。 数えきれや しない。（B まあ たくさんですね。）
（東京都台東区、13_a_102、660）

(7)(B コンド ウラオー ムコーエ ヤッチョイテ） A ウラオー モッチョッテ
(B 今度 裏を 向こうへ やっておいて） A 裏を 持っていて

A シャット コー ヒッパッテ **ホラ**。（B ヒッパラー ンー。）
A シャッと こう 引っぱって **ほら**。（B 引っぱるよ うん。） （高知県高知市、39_b_099、 152720）

(8)B ウチノ（A エー）コドモナンカネ ナク トキネ **ホラ** ヤカンノ トーマキ キタ。 アレネ
B うちの（A ええ）子供なんかね 泣く ときね **ほら** やかんの 籐巻［が］ 来た。 あれね

ワリー コワ ツレテクゾーッテ ユーンデスヨ。
悪い 子は 連れて行くぞと 言うんですよ。 （東京都台東区、13_a_028、34570）

(6)は雨の中での釣りから帰ってきたことを話している談話の一部分である。当該箇所では、話し手 A が魚釣りの成果を聞き手 B に説明している。(6)における注意喚起の対象はびく（魚籠）の中の魚である。びくとともに「ホーラ」という注意喚起を示す形式を用いることで結果的にびくの中の魚を見るように聞き手 B に促している。また、「ホーラ」の後に具体的な言語形式「ミテミロ」が発話されているが、何かを注意喚起する「ホーラ」という形式が用いられた時点で、聞き手 B が注意喚起先の何かに目を向けることは必然であり、

“ホラ”が結果的に聞き手にびくを見ることを促していると思われる。(7)は昔の仕事について説明している談話の一部分である。当該箇所では、ミツマタという植物の剝がし方を説明している。(7)における注意喚起の対象はミツマタの裏側を持って引っ張るときの動作であると考えられる。ホラによって話し手 A の手元に注意を集め、ミツマタの裏側をひっぱるという動作を聞き手 B に見るように促していると思われる。以上は目に見えるモノ・コトを指し示す例である。一方、(8)は今は無くなった昔の物について話している談話の一部分である。当該箇所では、やかんの藤巻が話題に上り、やかんの藤巻を使った脅し文句を聞き手 A に説明している。(8)における注意喚起の対象は「やかんの藤巻が来た」ことだと思われる。話し手 B はやかんの藤巻が来たことへ子どもの注意を促し、泣き止むことを求めている。ここでのやかんの藤巻は実在しないものであるため、話し手 B は「やかんの藤巻が来た」という概念的な単なる情報を指し示していると言える。これは大島（2001）の指摘に無い、目に見えない情報を指し示す例である。

以上のように“ホラ”にはモノ・コトを対象として注意喚起し、その場で観察可能な行動を促す用法をもつものがある。本研究ではこれを**用法 a「現場行動要求」**と呼ぶ。本用法は、話し手が対象に注意を向けさせ、結果、目視で観察可能な行動を聞き手に促す点で大島（2001:36）の指摘する「現場指示」に概ね該当する。ただし、本研究では注意喚起の対象がモノ・コトであり、コトについては情報も対象としている点が異なる。また、用法 a は観察可能なモノも対象とし、実際に指し示す点で未だ指示詞的用法が残っていると思われる。

### 4.2. 用法 b

注意喚起の対象がコトであり、「その場で観察可能な行動を促す」という条件に該当しないが、「話し手が聞き手と焦点内容を共有している」「話し手が焦点内容を言葉にして共有できる」という条件に該当するのが用法 b である。以下、(9)(10)が用例である。

(9) B コノ　クカ゜ズ　**ホレ**　エズデモ　オミョーｎズサン　マズル　ワゲ　ダネ。
　　B この　9 月[に]　**ほら**　いつでも　お明神さんを　祀る　わけ　だね。

　　(A アー　アー　ソーダネー。)
　　(A ああ　ああ　そうだねえ。)　（宮城県仙台市、04_c_001、79990）

(10) A トチオ　モッチョル　ヒトモ　ジブンニャ　ヤブダノ　ヘコ゜ナ　クオ　ツクッテ　エー
　　A 土地を　持っている　人も　自分には　藪田の　粗悪な　ところを　作って　良い

　　クオ　アテテネ。　(B ソー　ユー　コトヨ。ンー) A ンー　クモトゥオ　**ホラ**　モローテネ。
　　ところを　賃貸してね。(B そう　いう　ことよ。うん) A うん　年貢を　**ほら**　貰ってね。

　　(B ソーヨ　クモツ　クモトゥオ　ヨケ　モラワニャ　イカンキ)
　　(B そうよ　年貢　年貢を　たくさん　もらわないと　いけないから)
　　（高知県高知市、39_b_099、82060）

(9)は話し手が明神祭りで使う織りの布について説明している談話の一部分である。当該箇所では布を使う明神祭りの開催日について説明している。(9)における焦点内容は、「9 月にいつでもお明神さんを祀る」ことであると考えられる。それに対して聞き手 A は「ああ　ああ　そうだね。」と納得を示しながら肯定の応答詞を用いている。このことから、いつでも（毎年）9 月に明神祭りが開催されることを話し手 B と聞き手 A は共有していることがわかる。その上で、話し手 B はホレによって焦点化された「9 月にいつでもお明神さんを祀る」ことを明言し、聞き手に記憶を思い起こすように促していると思われる。また、(10)は昔の仕事について説明している談話の一部分である。当該箇所では土地の賃貸と年貢について説明している。(10)における焦点内容は「年貢を貰う」ことであると考えられる。談話において、聞き手 B は「そういうことよ」「そうよ」と話し手 A の発話に同意を示している。ここから、話し手 A の語る土地の賃貸と年貢の事情は、聞き手 B と共有されているものだとわかる。その上で、話し手 A はホラによって焦点化された「土地の貸し借りをして、地主は小作人から年貢を貰う」ことを明言し、聞き手に記憶を思い起こすように促していると考えられる。

いずれの“ホラ”も話し手と聞き手が焦点内容を共有しているという了解の上で話し手が焦点内容の想起を促し、かつ、話し手が焦点内容を具体的に言語化するものである。本研究ではこれを**用法 b「想起要求」**と

呼ぶ。これは、大島（2001:38）が指摘する、現場指示でない用法のうち、話し手と聞き手の間にある共通知識や共通体験をホラによって指し示すものにあたる。また、表１より分かるように、用法ｂは用法ａと並び、多くの先行研究にて言及があることから“ホラ”の代表的な用法の一つだと思われる。

### 4.3.　用法ｃ

注意喚起の対象がコトであり、「その場で観察可能な行動を促す」という条件に該当せず、「話し手が聞き手と焦点内容を共有している」という条件に該当するが、用法ｂと異なり「話し手が焦点内容を言葉にして共有できる」という条件に該当しないのが用法ｃである。以下、(11)(12)が用例である。

(11) B デカセギ　セーカツノ　セーカツノ　ナカノ　タノシミカ。　ウレシカッタ　コト　{笑}。コレワ
　　B 出稼ぎ　生活の　生活の　中の　楽しみか。　嬉しかった　こと　{笑}。これは

　**ホラ**　ヨメノ　ナンダシッテモ　(C ンー　ソレワ　アノ　ホレ　アノ　シューゲ゜ンダットカサ。)
　**ほら**　嫁の　なんていうか　(C んー　それは　あの　ほら　あの　祝言だとかさ。)
（長野県木曽郡間田村西野、20_e_002-1、11850）

(12) A リンチョーワ　ショイワ。　アー　アー　ンー　オモワ　ハイデ　クレチャウケンネ　ソノ
　　A ミツマタは　しやすいよ。ああ　ああ　うん　だいたいは　剥いで　くれているからね　その

　マダ（B ンー）A マタガ　イッパイ　アルキ　ソノ　マタノ　クー　コー　ノケタラ　**ホラ**。
　まだ（B うん）A 股が　いっぱい　あるから　その　股の　ところを　こう　除けたら　**ほら**。

　ンー　(B マタノ　クオ　チョイチョイト　ナオイチャッタラ　ソレデ　ヨカッタ。)
　うん　(B 股の　ところを　ちょいちょいと　直してやったら　それで　よかった。)
（高知県高知市、39_b_099、148420）

(11)は出稼ぎ生活の中の楽しみについて語っている談話の一部分である。(11)における焦点内容は「嫁のなんていうか」に続く何かであると考えられる。話し手Ｂは焦点内容を具体化できず、ホラによって焦点内容を指し示したまま聞き手Ｃに会話を託す。聞き手Ｃは話し手Ｂが示そうとした焦点内容を既に思い出しており、「祝言」を提示する。(12)は昔の梶の皮をはぐ仕事について語っている談話の一部分である。(12)における焦点内容は「股のところをこう除けたら」に続く何かであると考えられる。話し手Ａは焦点内容を具体的に言い切ることができず、ホラによって焦点内容を指し示したまま聞き手Ｂに会話を託す。聞き手Ｂは話し手Ａが指し示した焦点内容に既に思い至っており、「股のところをちょいちょいと直してやったらそれでよかった」と、簡単な作業で「よかった」ことを提示する。

いずれの“ホラ”も話し手が言語化できない焦点内容を聞き手が回答していることから、両者の間で焦点内容は共有されている。しかし、「想起要求」と異なり、話し手が焦点内容を明示せずとも聞き手には焦点内容が想起できるため、聞き手の側から焦点内容を回答するのが本用法の特徴である。これは換言すれば、話し手と同じく焦点内容に関する情報をもつ聞き手へ回答を要求する働きを持つものと解釈できる。本研究ではこれを**用法ｃ「回答要求」**と呼ぶ。本用法は、大島（2001）をはじめとした先行研究において言及がない用法である。

### 4.4.　用法ｄ

注意喚起の対象がコトであり、「その場で観察可能な行動を促す」「話し手が聞き手と焦点内容を共有している」という条件に該当せず、「聞き手が文脈から焦点内容を予見できる」という条件のみに該当するのが用法ｄである。以下、(13)(14)が用例である。

(13) G スギノ　カーオ　マー　ヤッパリ　ムイテ。　(H ンー。) G ホレデ　ヤネーイ　マ　イ　ア
　　G 杉の　皮を　まあ　やはり　剥いて。　(H うん。) G それで　屋根に　まあ　イ　ア

　イッケタ　モンガ。(中略) イマダラー　トタントカサー。(H ンー。) G マー　カワラ　チューンガ
　のせた　ものだ。(中略) 今なら　トタンとかさ。　(H うん。) G まあ　瓦　というのが

　ジューブン　テニ　ハイル　ワケダー。(H ンー。) G トージワ　ソー　ユー　モンガ　**ホラ**
　十分　手に　入る　わけだ。　(H うん。) G 当時は　そう　いう　ものが　**ほら**

ナカッタ　ワケダノー。
無かった　わけだね。　（群馬県甘楽郡下仁田町、10_e_012、96180）

(14) C アノ　ソー　ユー　コトヤ　オジャミヤナ。　ホデ　ナツワ　アノ　**ホレー**　カイスイヨク。
C あの　そう　いう　ことや　お手玉だね。　それで　夏は　あの　**ほら**　海水浴。

モー　ワタシカ゜　チーサイ　トキヤッタ　モー　ホエ　ウミー　ユーンカ゜モ　ハジメテグライデネ。
もう　私が　小さい　時だったら　もう　それ　海[と]　いうのも　はじめてぐらいでね。

(B フン　フン　ンー　ハー　ハー　ハー。)
(B ふん　ふん　んー　はあ　はあ　はあ。)　（兵庫県相生市、28_d_099、4300）

(13)は話し手Gが戦後直後の山仕事について説明している談話の一部分である。当該箇所では特に住居の屋根について、現在（収録時1985年）は容易に手に入るトタンや瓦が手に入らず、戦後直後には杉の木の皮をかぶせていたことを語っている。(13)におけるホラの焦点内容は、「屋根の材料となる瓦やトタンが手に入らなかった」ことだと考えられる。まず、(13)は話し手Gの昔語りであり、聞き手Hが戦後の生まれ（話し手Gとの年齢差32歳）であることから経験の共有はない。また談話中、聞き手Hは「うん」「ああ」などのあいづちに終始し、情報の受け手となっていることから話し手Gの発話内容に関する知識にも乏しいと推測される。ここから、「戦後当時は屋根の材料となる瓦やトタンが手に入らなかった」という焦点内容に関して、情報を持っているのは話し手Gのみということになり、話し手Gと聞き手Hは焦点内容を共有していないと言える。ところで、第4節冒頭にて“ホラ”にはすべて「注意喚起」という要素があることを述べた。つまり、当該用法においても“ホラ”は何かを指し示していることになる。しかし、前述したように(13)において話し手と聞き手は焦点内容を共有しておらず、聞き手は指し示される先に思い至ることができない。したがって、このような場合、聞き手は“ホラ”が指し示すコトを文脈から推測することになる。(13)においては、「戦後」というキーワードをもとに、物資不足などの理由で十分な材料が手に入らなかったということは想像に難くなく、それにより「屋根の材料となる瓦やトタンが手に入らなかった」という焦点内容を聞き手は予見することができる。

(14)は、話し手Cが女性の幼少期の遊びについて、男性である聞き手Bに説明している談話の一部分である。(14)におけるホラの焦点内容は「海水浴に行った」ことである。この焦点内容について、話し手Cは当然経験として知識がある。一方で、焦点内容を含む発話は話し手Cの昔語りであり、聞き手Bはその内容について初めて知ったと思われる。これは聞き手Bの「ハー」というあいづちからも分かる[8]。この点から、聞き手Bと話し手Cは焦点内容を共有していないと考えられる。しかし、夏に行う遊びとして「海水浴に行く」ということは一般的なことであり、聞き手Bは「幼少期の遊び」「夏」という談話上のキーワードから「海水浴に行った」という焦点内容を予見することは可能である。

(13)(14)における“ホラ”は、換言すれば、話し手が焦点内容に関する情報をもたない聞き手へ、焦点内容の予想を促す働きをしていると解釈できる。このように“ホラ”にはコトを対象として注意喚起し、焦点内容の予想を促すものがある。本研究ではこれを**用法d「予想要求」**と呼ぶ。尚、本用法は、大島（2001:39-40）が指摘する現場指示でない用法のうち、あたかも知識が共有されているか、当然共有可能であるかのように表現するもの、知識とは表現しにくい話し手側の感覚的なものを当然理解共有されるであろうものとして表現するものに近い。しかし、大島（2001）が当該用法をあたかも知識が共有されているように表現するという、本研究での用法b「想起要求」のように振る舞う用法だと考えているのに対し、本研究の用法d「予想要求」は“ホラ”に共通する「注意喚起」という要素をもとに文脈からの予想を要求する用法と考えている点で異なる。また、用法b「想起要求」、用法c「回答要求」とは、指し示す対象が話し手と聞き手の間に共有されていないという点で大きく異なる。

[8] 謝（2021）によると、応答詞「ハー」は相手の発話内容や目の前の状況が、心の中で十分受け入れられていないという基本的意味を持つという。相手の発話内容が十分受け入れられていないということは情報の処理に時間を要しているということであり、聞き手Bにとって、話し手Cが海水浴に行ったという経験の話は既知ではないと考えられる。

### 4.5. 用法 e

注意喚起の対象がコトであり、「その場で観察可能な行動を促す」「話し手が聞き手と焦点内容を共有している」という条件に該当しないのは用法 d と共通であるが、「聞き手が文脈から焦点内容を予見できる」という条件にも該当しないのが用法 e である。以下、(15)(16)が用例である。

(15) B コエズ　コノ　マエノ　ウジワ　ナンボダイナ　ナンネンコロダイナ　タデダノネ　(中略)
B こいつ　この　前の　家は　いくらだろうな　何年頃だろうな　建てたのね　(中略)

B ゴーログノ　X5 テ　オラド　エドゴダゲントモ　ソノ　シトノ　コｎドモノ　**ホレ**。
B 郷六の　X5 って　俺と　いとこだけれども　その　人の　子供の　**ほら**。

(A ン　ン。)　B テース　キテ　タデデ　ケダンデガネ。　エー。　(A アー　ソスカ。)
(A うん　うん。)　B 亭主［が］　来て　建てて　くれたのだね。　ええ。　(A あー　そうですか。)
(宮城県仙台市、4c_002、8400)((5)の再掲)

(16) J メワ　メニ　モー　アタ　**ホラ**　モー　ゴネン　カヨーテ　ダイーブン　モ　ボヤット
J 目は　目に　もう　あなた　**ほら**　もう　五年　通って　だいぶん　もう　ぼやっと

ナッタ。　アータチガ　カオワ｛笑｝　ミエントバイタ。(K アー　アッ　ハー。)　(Z ンー。)
なった。　あなたたちの　顔は　｛笑｝　見えないのよ。　(K あー　あ　はー。)　(Z うん。)
(熊本県熊本市高橋町、43b_010、81990)

(15)は話し手 B が自身の家を建てた時期や大工について説明している談話の一部分である。当該箇所では特に現在の話し手 B の住居の一つ前の家を建てた大工について、話し手 B との関係性を聞き手 A に説明している。(15)におけるホレの焦点内容は「話し手 B の旧居を建てた大工の素性」だと考えられる。まず、(15)は話し手 B の旧居についての話題であり、その詳細を知るのはこの場において、話し手 B のみである。聞き手 A の「あー　そうですか」という応答も旧居についての情報を聞き手 A が既知である可能性を否定する。ここから、「話し手 B の旧居を建てた大工の素性」という焦点内容に関して、情報を持っているのは話し手 B のみということになり、話し手 B と聞き手 A は焦点内容を共有していないと言える。用法 d「予想要求」と同様に、焦点内容を共有していない状態で“ホラ”を使用しているため、聞き手は“ホラ”が指し示すコトが何であるのか文脈から推測することとなる。しかし、(15)の場合、文脈上の情報はすべて話し手 B 個人に関するものであり聞き手 A は焦点内容を文脈から推測することが困難である。したがって、聞き手は焦点内容について話し手からの情報を認知する（受け取る）のみとなる。

(16)は話し手 J が自身の視力低下について述べている談話の一部分である。(16)の焦点内容はホラの係り先「五年通って」をもとに「眼科に 5 年間通院したこと」だと考えられる。(16)は話し手 J の身体の事情に関連する話であり、その詳細を知るのは基本的に話し手 J である。聞き手 K,Z がその事情を既知である可能性はあるが、聞き手 K の「ハー」や聞き手 Z の「ンー」より既知ではないと思われる[9]。したがって、焦点内容の情報を持っているのは話し手 J のみになり、話し手と聞き手は焦点内容を共有していないことになる。そのため、焦点内容を文脈より推測することとなるが、ホラの焦点内容を推測できる情報が「目」のみと限られていることに加え、文脈上の情報は話し手 J 個人に関するものであり、聞き手 K,Z は焦点内容を文脈から推測することが困難である。したがって(16)も焦点内容に関する情報を認知するのみとなる。

このように“ホラ”にはコトを対象として注意喚起するが、焦点内容について予想がつかず、結果的に認知のみを促す用法がある。本研究ではこれを**用法 e「認知要求」**と呼ぶ。本用法は、第 2 節で触れたように、大島（2001）をはじめとした先行研究において言及がない用法である。また、コトを焦点内容とする用法の中で、唯一聞き手に積極的な働きかけをしないのが特徴である。

[9] 「ハー」については(13)と同様、謝（2021）による。「ンー」については、やや下降気味で発音されていることから、田窪・金水（1997:272）における「迷い」（自分に対する課題として与えられた相手の発話を受け入れ、完全に理解した上で、それに対する解答が何らかの理由で即座に出せない状態にある）に該当すると思われる。

## 5.　まとめと今後の課題

本研究では、全国の“ホラ”1129 件を対象に分析したことにより、以下の 5 つの用法を導き出した（図 1）。

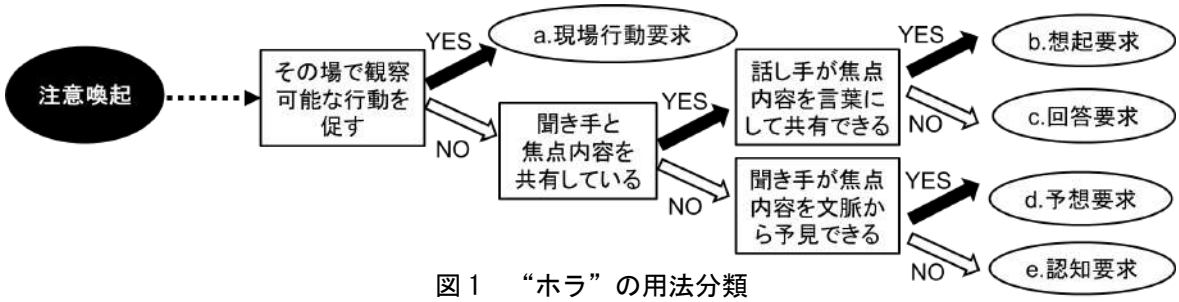



**図 1　“ホラ”の用法分類**

本研究の意義は、先行研究にない新用法を発見したこと、そして各用法を体系的に整理・モデル化し、用法どうしの連続性を示したことである。図 1 の各用法をみると、観察可能なモノも指し示し、「注意喚起」の実質的な働きが強い「a. 現場行動要求」に対し、指し示すものがコト化した「b. 想起要求」、さらに積極的に対象を指し示す働きを持たない「e. 認知要求」と、実質的な意味が薄れ、用法が抽象化する様子がみられる。このような意味の希薄化は、感動詞的用法の発達に伴う現象とも考えられる。ここからは今後さらなる考察が必要となるが、仮に「e. 認知要求」が最も指示詞的用法から離れた（意味の希薄化が進んだ）用法だとするならば、それが集中的に現れる地域は感動詞が発達している地域だと言うことができるかもしれない。小林・勝又（2022:362）は、方言感動詞「ナンダベ」が、感動詞の使用が活発な東北（小林・澤村 2014:211）で最もその用法を発達させていることを指摘する。このような地理的な用法の広がり・偏りを掴むための礎としても本研究は位置づけられる。また、談話標識の出現傾向により東京方言、大阪方言、仙台方言を比較した琴（2005:14）は、仙台方言は「自分が発話権を持つことをアピールし、情報共有を積極的に働きかけていく方言」であると述べ、その論拠として「情報共有喚起（ホラ）」等の形式の使用頻度が高いことを挙げる。小林・澤村（2014:108）は、仙台方言の自分の側に引き込んでいく話しぶりの背景に「相手も自分と同じ知識や考え・感情をもっているはずだという前提」があると述べる。このような話しぶりの背景を小林・澤村（2014）・小林（2023）では「言語的発想法」と呼ぶ。この「言語的発想法」をより明瞭に明らかにするためにも「e. 認知要求」のような用法も視野に入れつつ、地理的な分布をみることが重要となる。なぜなら、「e. 認知要求」を積極的に用いる地域ほど、「相手も自分と同じ知識や考え・感情をもっているはずだという前提」を持って話す地域、即ち「共感の強要という主観的なものの言いかた」（小林・澤村 2014:108）をする、「言語的発想法」が未発達な地域であることが分かるからである。今後は、今回整理した用法分類をもとに、“ホラ”の出現地域と用法の対応や用法と“ホラ”の出現形態・音調との対応をみることを課題とする。

### 文献


大島弘子（2001）「ホラの機能について」『日本語教育』108, pp. 34-41/琴鐘愛（2005）「日本語方言における談話標識の出現傾向－東京方言、大阪方言、仙台方言の比較－」『日本語の研究』1(2), pp. 1-18/琴鐘愛(2016)「説明的場面で使用される談話標識ホラの社会言語学的研究―東京・仙台地域の若年層の地域差を中心に―」『日本語教育研究』34, pp. 45-5/国立国語研究所（2025）「日本語諸方言コーパス(COJADS)」https://www2.ninjal.ac.jp/cojads/index.html?targ=outline（閲覧日 2025 年 9 月 26 日）/小林隆（2023）『語用論的方言学の方法』ひつじ書房/小林隆・勝又琴那（2022）「感動詞「ナンダベ」の用法と地理的分布」小林隆編『全国調査による感動詞の方言学』ひつじ書房/小林隆・澤村美幸（2014）『ものの言いかた西東』岩波新書/渋谷勝己(2002)「山形市方言の談話マーカ「ホレ・ホリャ;アレ・アリャ」」『阪大社会言語学研究ノート』4, pp. 131-142/謝霞（2021）「現代日本語感動詞「はあ」の意味と音調」『文化』85（1, 2）, pp. 21-42/杉浦滋子(2017)「『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』にみる日本語諸方言のフィラー」『言語と文明』15, pp. 1-20/田窪行則・金水敏（1997）「応答詞・感動詞の談話的機能」音声文法研究会編『文法と音声』, pp. 257-279, くろしお出版/劉礫岩(2015)「ホラの相互行為上の働き」『電子情報通信学会技術研究報告』115（185), pp. 65-70


### 使用ツール

「日本語諸方言コーパス（COJADS)」データバージョン 2025.03
https://chunagon.ninjal.ac.jp/cojads/search　（2025 年 9 月 26 日確認）

### 付記


本研究は JSPS 科研費 JP 21H04351 の助成を受けたものです。

首都圏方言における否定辞の使用とラ行音の撥音化：
コーパス調査に基づいて

パンチェンコ・ユーリイ[1]

1. 研究の背景・目的

首都圏方言では、標準的な否定辞ナイのほかに、在来方言に由来するネー、および西日本の方言から広まってきたと考えられるンの2種類の非標準的な否定辞が使われている。次の例は、日本語日常会話コーパス（CEJC）のものである。

(1)　ここら辺知ら**ねえ**からわかん**ねえ**よ　（CEJC：会話 ID C002_008，開始位置 29540）

(2)　いら**ん**ことをくっつけるわけですよ　（CEJC：T002_019，36790）

さらに、非標準的な形として、否定辞の前のラ行音が撥音化した語形も頻繁に使われるようである。撥音化が出現し得るのはナイとネーの前においてである。

(3)　そこが決ま**んない**と　（CEJC：C001_003，105470）

(4)　メールだとほんとに伝わ**んねえ**　（CEJC：K003_006，61410）

首都圏若年層方言における否定辞の使用とそれに関わる撥音化の出現状況はパンチェンコほか（2024）において既に談話資料をもとに考察されている。そのほかにも関連の先行研究はあるが、これらの非標準形の使用状況は十分明らかにはなっていない。そこで、先行研究の指摘をふまえながらその使用状況を記述すること、および、世代差をもとにした通時的な動態の分析を行うことを目指し、否定辞の使用とラ行音の撥音化についてコーパス調査を試みることにした。

本調査の目的は、動詞の否定辞ネー、ンの使用、また、ラ行音の撥音化について、動詞の活用型、話者の年齢、性別といった言語内・外的要因がどのような影響を与えているのか調べることである。なお、ンの前のラ行音では撥音化が起こりえないため、撥音化の考察ではンは扱わない。

2. 先行研究

2.1 否定辞について

首都圏若年層方言における否定辞ネーとンの使用を分析した先行研究としてパンチェンコほか（2024）がある。談話資料に基づいて首都圏若年層方言における否定辞の使用と撥音化の出現状況を考察し、最も多く使われる否定辞はナイであり、家族や大学入学以前からの友人と話すような、くだけた場面でネーとンを使うこともあることが確認された。そして、五段動詞ではン、それ以外の動詞ではネーが選ばれる傾向があると推測されている。

複数の否定辞が併用される状況について、首都圏以外での研究もある。例えば、高木（2006）は関西若年層方言の談話を調査対象にして、否定辞の基本形について、ヘンの使用率がンの使用率を少し上回ると述べている。ただし、動詞の活用型ごとにその分布を確認すると、一段動詞、カ変・サ変動詞より五段動詞でンが使われやすいとされる。一段動詞では、標準語形ナイの使用がンを上回る（ヘン 72.0%、ナイ 17.1%、ン 10.9%）。日本の旧植民地だった台湾の残存日本語を調査した真田（2009）、南米日系社会の東日本出身者を調査した白岩（2015）も、東西方言が接触してナイとンが併用されるなかで、ンは五段動詞で使われやすく、他の活用型の動詞ではナイが使われやすいと述べている。

2.2 撥音化について

否定辞の前のラ行音の撥音化は否定辞の使用状況に比べてより幅広く研究されているようである。那須（2015）、鶴岡（2016）は「られない」という形式におけるレ音の撥音化を形態面、音声・音韻面から考察し、一段動詞で可能を表す場合が最も撥音化しやすく、一段動詞で受身を表す場合、ラ行五段動詞で受身を表す場合の順に撥音化しにくくなることを指摘している。

パンチェンコほか（2024）は首都圏若年層方言の談話における撥音化の出現状況を考察し、五段動詞の否定辞の前のラ音のほうが一段動詞の場合のレ音よりも撥音化しやすいという結果を示している。ただし、談話中の五段動詞の用例のほぼ8割を占めるのは「わかんない」（「わかる」の撥音形）であった。また、一段動詞の例は、モダリティ表現「かもしれない」、可能表現「られる」、「てくれない」という特定の表現の否定形に限られている。宮城県方言における撥音化を調査した田附（2019）も、撥音化が起こる動詞のほとんどの用例は「わかる」であると指摘している。

[1] ぱんちぇんこ・ゆーりい（立正大学大学院）panyurij[@]gmail.com

レ音が特定の表現を除いて撥音化しないことについて、Ichimura（2006）は同音異義形の阻止を要因として挙げている。例えば、「分からない」と「別れない」の両方が撥音化すると、撥音化したワカンナイが同音異義になってしまう。そして、競合する動詞のうちどちらが撥音化しやすいのかという点で、使用頻度の高い動詞が優先される可能性があると孫（2016）が述べている。

竹内（2022）は全国出身の 33 人の若者を対象にアンケート調査を行い、撥音化の出現に影響を与えうる要因として、動詞のモーラ数を指摘する。その調査結果では、終止形が 3 モーラの動詞が 2 モーラの動詞より撥音化が起こりやすい傾向がある。語の使用頻度や動詞語幹の音声的な構成の影響はあるにしても、それほど強くないようである。しかし、回答者数が限られていて、彼らの出身もバラバラなので、より根拠のある結論を出すためには、追加の調査が必要だと考えられる。本発表のコーパス調査はその検証に貢献する可能性がある。

ラ行音の撥音化の原因に関しては、斎藤（1986）、那須（2015）、孫（2016）が考察している。斎藤（1986）は、r も n も共鳴子音であるため、r が n に同化しやすいと論じ、撥音化の出現の音声学的な要因を指摘している。那須（2015）は、「られ」という形態素における同じ有声音 r の連鎖が阻止されることによって、二つ目の r がそれに後接する n に同化してしまうと、音韻論的な立場から撥音化を解釈する。孫（2016）は「られない」だけでなく、動詞の撥音形（ンナイ形）の構成と使用を最適性理論の立場から考察し、くだけた話し方では、より短い語形になるよう動詞活用の接尾辞の連合（-nai/-anai）が統合していく（つまり、2 つの異形態が 1 つの-nai に統合する）と述べている。

コーパス調査としては、関東・東北方言における実態を日本語諸方言コーパス（COJADS）によって考察した佐藤ほか（2024）の調査がある。佐藤ほか（2024）の調査結果については、本発表の調査結果とあわせて後述する。

## 3. 調査方法

ネーはナイの基本形で連母音 ai が融合した形であり、基本形以外の活用形を持たない。そのため、今回の調査では基本形の用例のみを対象としてナイ、ネー、ンを比較した。本発表では基本形にいわゆる終止形と連体形の両方を含むものとする。また、動詞のほか「～られない」、「～がらない」のようにコーパスで助動詞、接辞としてラベリングされた要素につく用例も対象にした。

調査では日本語日常会話コーパス（CEJC）の東京、埼玉、千葉、神奈川の 1 都 3 県出身者のデータを用いた。ナイとネーの用例収集にあたっては、「中納言」の短単位検索で、検索条件として活用型の小分類を「助動詞－ナイ」と設定した。そして、前方共起条件として品詞を「動詞」、「助動詞」、「接尾辞」とした。得られた用例から、語形が基本形のナイ、ネー（短い語形のネを含む）を抽出した。ンの用例は、検索条件として活用型の小分類を「助動詞－ヌ」に設定して同様の方法で得た。ラベリングの誤り、話者の言い誤りと見られる例は除外した。また、丁寧体の「ません」も考察から除外した。

タンナイ（タンネー）という撥音形が一段動詞「足りる」、五段動詞「足る」のどちらの否定であるのか判断できないため、「足りる」「足る」の例は一括して除外した。

鑓水（2014）の考察から、首都圏方言は東京の都市圏としての拡大、および、隣県との間での日常的な人口流動が進んだ戦後に形成されたと考えられる。CEJC は 0-9 歳から 90-99 歳の各世代の会話を収録しているが、その会話が録音されたのは 2016-2020 年である。本調査では 0-9 歳から 60-69 歳のおおむね戦後生まれ世代の首都圏（1 都 3 県）出身の話者を首都圏方言の話者と見なす。おおむね戦前生まれの 70-79 歳以上の話者は、首都圏方言話者ではなく、各地の伝統方言の話者と見なした。以下、本発表で示す表では、世代差を見る表 3 を除き、60 代以下の話者の用例の集計結果を示す。

## 4. 否定辞に関する調査結果

表 1 を参照すると、ナイが最も使用されていることがわかる。とはいえ、在来の関東方言に由来するネー、西日本の方言に由来するンも少し使われている。

表 1　否定辞の用例数

| ナイ | ネー | ン |
|---|---|---|
| 13109<br>(95.32%) | 490<br>(3.56%) | 154<br>(1.12%) |

表2からわかるように、ネーはどの活用型の動詞にでもつく。それに対して、ンは五段動詞につきやすく、他の動詞にはつかない傾向がある。

表2　活用型ごとの否定辞の使用状況

| | ナイ | ネー | ン |
|---|---|---|---|
| 五段動詞 | 5373<br>(93.61%) | 235<br>(4.09%) | 132<br>(2.30%) |
| 一段動詞 | 6910<br>(96.49%) | 230<br>(3.21%) | 21<br>(0.29%) |
| カ変動詞 | 256<br>(96.24%) | 9<br>(3.38%) | 1<br>(0.38%) |
| サ変動詞 | 570<br>(97.27%) | 16<br>(2.73%) | 0<br>(0.00%) |

ンの用例数が多いのは「知る」(42例)、「わかる」(39例) であり、続いて「いく」(15例)、「要る」(9 例)、「しれる」(8 例)、「言う」(5 例)、「思う」(4 例) である。「いく」の場合、ほとんどの用例(計15例のうち10例) は「～なけりゃいかん」、「～ちゃいかん」、「～わけにはいかん」のような固定化した表現だった。「しれる」は、全ての用例が「かもしれん」という固定化した表現だった。その他の動詞では、ンの用例は3例以下であった。

近年「知らんけど」という固定化した表現が広まっているが、本調査での「知らんけど」の例は「知らん」全体の 42 例のうち 8 例に過ぎない。また、その使用状況について世代差は確認できなかった。

ン使用の世代差を見るため、ンが使われやすい五段動詞での状況を世代別にまとめたのが表 3 である。世代差を見るため、70 代以上のデータも示す。表 3 に示されている通り、ンの使用が最も多い世代は10-19歳である。若年層でンの使用が増加している可能性が考えられる。

筆者は、このコーパス調査とは別に、首都圏若年層話者 71 人 (2001-2006 年生まれの大学生) を対象にして 2025 年 1 月にアンケート調査を実施した。その調査の結果でも、若年層話者は否定辞としてネーよりンをよく使うことが分かった。このアンケート調査では、10 例の動詞について、それぞれの否定辞を使用するか質問したが、使用する回答者の割合の平均は、五段動詞 (かかる、知る、つく、降る、やる、わかる) でンは45.6%、ネーは26.2%、一段動詞 (しれる (かもしれない)、食べる、見える、食べられる) でンは37.0%、ネーは18.0%であった。

興味深いことに、コーパスではンの使用が五段動詞に偏るのに対し、アンケート調査では、一段動詞 (「られる」を含む) であってもネーよりンの使用率が高かった。それは、ンとネーについての話者のイメージが異なることに起因する可能性がある。具体的にいえば、ネーは伝統方言の形式として非標準性が高いため、その使用が意識のレベルで避けられると考えられる。アンケートで意識的にンとネーを比較しながら回答するとき、話者はぞんざいすぎるネーを使わないと意識し、使用語形としてンだけを回答したのではないか。コーパス調査の結果から、実際にはネーの使用が多いと確認される。首都圏若年層の否定辞の使用において、言語意識と実際の使用状況が違う可能性があるといえる。

若年層でンの使用率が増加しているとすれば、それは関西方言の人気の高まりをあらわしていると推測できる。川相 (2002) によると、東京圏への人口流入状況を 10 年おきに見た場合、流入元の割合は 1990 年までは東北地方が最も多かったが、2000 年には中部地方、近畿地方が東北地方を上回っている。内閣府 (2024) の示す2016-2023年のデータでも、東京圏への人口流入は、東海・北陸以西の西日本からの割合が甲信越以東の東日本の2倍程度を占めており、大阪圏、名古屋圏から大きな流入があることが示されている。ここから、西日本からの人口流入による直接的な接触の影響もあると考えられる。

ネーはどの世代の話者でも見られるものの、20 代の話者ではその使用率が年上の世代に比べて多いようである。中年層以上の話者は、録音されるとき、明らかに非標準的な方言形ネーを避け、標準形のナイを使うようにしていた可能性がある。それに対して、若年層の話者はよりくだけた語形を使ったと考えられる。つまり、コーパスにおいて世代ごとに会話のスタイルが不均一だった可能性も考えられる。

表 3　世代ごとの否定辞の用例数（五段動詞）

| 年齢 | ナイ | ネー | ン | ン/ネー |
|---|---|---|---|---|
| 0-9 歳［計 10 人］ | 87［9 人］<br>(95.60%) | 1［1 人］<br>(1.10%) | 3［2 人］<br>(3.30%) | 3.00 |
| 10-19 歳［計 46 人］ | 393［45 人］<br>(89.93%) | 23［9 人］<br>(5.26%) | 21［14 人］<br>(4.81%) | 0.91 |
| 20-29 歳［計 61 人］ | 1144［61 人］<br>(90.87%) | 78［21 人］<br>(6.20%) | 37［14 人］<br>(2.94%) | 0.47 |
| 30-39 歳［計 58 人］ | 1128［58 人］<br>(93.92%) | 52［12 人］<br>(4.33%) | 21［12 人］<br>(1.75%) | 0.40 |
| 40-49 歳［計 63 人］ | 787［62 人］<br>(95.98%) | 21［8 人］<br>(2.56%) | 12［6 人］<br>(1.46%) | 0.57 |
| 50-59 歳［計 76 人］ | 1256［75 人］<br>(94.51%) | 44［14 人］<br>(3.31%) | 29［14 人］<br>(2.18%) | 0.66 |
| 60-69 歳［計 48 人］ | 578［47 人］<br>(95.85%) | 16［11 人］<br>(2.65%) | 9［6 人］<br>(1.49%) | 0.56 |
| 70-79 歳［計 31 人］ | 204［31 人］<br>(97.61%) | 1［1 人］<br>(0.48%) | 4［3 人］<br>(1.91%) | 4.00 |
| 80-89 歳［計 11 人］ | 64［11 人］<br>(92.75%) | 5［4 人］<br>(7.25%) | 0［0 人］<br>(0.00%) | 0.00 |
| 90-99 歳［計 5 人］ | 42［5 人］<br>(37.84%) | 63［3 人］<br>(56.76%) | 6［3 人］<br>(5.41%) | 0.10 |

その語形の使用が見られる話者の数を［　］のカッコ内に示した。用例数の割合を（　）のカッコ内に示した。
「ン／ネー」の欄にはンの用例数をネーの用例数で割った値を示した。

なお、一段動詞の場合は、ンの増加がはっきり見られない。そして、ネーは五段動詞の場合と同じように、どの世代の話者によっても用いられる。

表 4 に示す通り、ネーは女性より男性のほうが使用が多いようである。一方で、ンの使用には性差がはっきり見られない。ネーは伝統的な方言形として非標準性が強いと意識され、男性より丁寧な言い方を志向しやすい女性はその使用を避けると考えられる。ンはネーほど非標準性が強くない否定辞で、男女を問わず使われうるのではないか。それもンの使用の増加のもう一つの理由と見なしてもいいと考えられる。

表 4　話者の性別ごとの否定辞の用例数

| 性別 | ナイ | ネー | ン |
|---|---|---|---|
| 女性 | 7460<br>(97.85%) | 92<br>(1.21%) | 72<br>(0.94%) |
| 男性 | 5649<br>(92.17%) | 398<br>(6.49%) | 82<br>(1.34%) |
| | | | $\chi^2$=320.27，p 値<0.01 |

5．撥音化に関する調査結果

ラ行五段動詞、一段動詞に否定辞ナイ、ネーがついた用例について、ラ行音が撥音化しない標準形を「撥音化なし」、撥音化した非標準形を「撥音化あり」として撥音化の出現状況をまとめたのが表 5 である。この表から、首都圏方言において否定辞の前のラ行音の撥音化は大変広く見られる現象だと言える。

表 5　否定辞の前のラ行音の撥音化の出現状況（ナイとネーを一括して）

| 撥音化なし | 撥音化あり |
|---|---|
| 2907<br>(51.48%) | 2740<br>(48.52%) |

表５のデータを動詞の活用型ごとに分析すると、表６のように一段動詞のリ音、レ音より五段動詞のラ音において撥音化が出現しやすいことが確認できる。この結果は、他の方法で行われた先行研究の調査結果と共通している。

表６　活用型ごとの撥音化の出現状況（ナイとネーを一括して）

| | 撥音化なし | 撥音化あり |
|---|---|---|
| 五段動詞（ラ音） | 1679<br>(41.85%) | 2333<br>(58.15%) |
| 一段動詞（リ音、レ音） | 1228<br>(75.11%) | 407<br>(24.89%) |

これを、主に明治・大正生まれ世代の談話を収めた日本語諸方言コーパス（COJADS）を分析した佐藤ほか（2024）と比べてみよう。佐藤ほか（2024）の調査では、埼玉、千葉、東京、神奈川の４都県のデータを合計すると、五段動詞の否定辞の前のラ音における撥音化の出現率は 35.6%である（総数：267 例、撥音形：95 例）。本調査の 58.15%はそれより高いことがわかる。その違いは用例数による可能性もあるが、いずれにしても首都圏においてラ音の撥音化は大変根強く存在する現象だと言える。若年層の談話を分析したパンチェンコほか（2024）で得られた 47.2%（総数：108 例、撥音形 51 例）というラ音の撥音化の出現率もそれを裏付ける。

なお、撥音化については、調査した範囲で特段の世代差は見られなかった。

撥音化の出現率を否定辞ごとに分析すると、表７のように、ナイの前では、撥音化がない形式が撥音形を上回っていることが分かる。一方で、ネーの前の場合、撥音形の方が上回るという逆の傾向がある。

表７　否定辞ごとのラ行音の撥音化の出現状況

| 否定辞 | 撥音化なし | 撥音化あり |
|---|---|---|
| ナイ | 2817<br>(52.12%) | 2588<br>(47.88%) |
| ネー | 90<br>(37.19%) | 152<br>(62.81%) |

以下では、ナイとネーを別々に扱って分析を行う。ナイの前のラ行音の撥音化について、五段動詞の場合、よく撥音形が見られた動詞は「わかる」、「変わる」、「かかる」、「しゃべる」、「終わる」、「集まる」のように終止形が 3 つ以上のモーラからなる動詞である。終止形が 2 モーラの動詞の場合、「やる」、「なる」以外で撥音形は少なかった。

終止形が 3 モーラ以上の動詞は「わかる」とそれ以外、2 モーラの動詞は「やる」「なる」とそれ以外に分けて撥音化の状況を示したのが表８である。表８から、2 モーラの動詞より 3 モーラの動詞において撥音化が起こりやすい傾向が明らかに見られる。「やる」「なる」以外の２モーラの動詞では撥音化が極端に少ない。

表８　否定辞ナイの前のラ音の撥音化の状況（五段動詞）

| 動詞 | | 撥音化なし | 撥音化あり | 撥音形の割合（%） |
|---|---|---|---|---|
| 3 モーラ以上 | わかる | 192 | 1650 | 89.58 |
| | その他 | 278 | 330 | 54.28 |
| 2 モーラ | やる、なる | 212 | 205 | 49.16 |
| | その他 | 923 | 22 | 2.33 |

一段動詞の場合は、「しれる」（「かもしれない」の要素として）、「られる」、「くれる」（「てくれる」の要素として）以外に撥音形が見られなかった。つまり、撥音化が見られるのは固定化された表現の場合に限られている。表現に含まれる要素の相互的な結びつきが強く、発話の際に表現全体の意味が

失われないため、撥音化しやすいと考えられる。この調査結果はパンチェンコほか（2024）の調査結果と共通している。

興味深いことに、「取られる」、「守られる」のようにラ行五段動詞の受身形では撥音化が観察されなかった。那須（2015）の考えを踏まえると、ラ行五段動詞では、tor-are-ru のように「られる」の中に形態素の境界があるため、撥音化の出現が妨げられると推測される。

表 9　否定辞ナイの前のリ音、レ音の撥音化の状況（一段動詞）

| 動詞 | 撥音化なし | 撥音化あり | 撥音形の割合（%） |
|---|---|---|---|
| しれる | 455 | 304 | 40.05 |
| られる | 131 | 49 | 27.22 |
| くれる | 48 | 28 | 36.84 |
| その他 | 578 | 0 | 0.00 |

「しれる」「くれる」について、「かもしれない」「てくれる」の要素の場合と本動詞としての場合は一括して示した。表 11 も同じ。
「られる」について、表 9 に示したのは一段動詞の場合の「られる」であり、ラ行五段動詞の受身形は示されていない。表 11 も同じ。

次にネーの前の撥音化の出現状況を詳しく見てみよう。表 10 からすると、終止形が 3 モーラ以上の五段動詞では、ほとんど例外なく撥音化する。2 モーラの五段動詞の場合、「やる」と「なる」は撥音化するが、それ以外の動詞ではほとんど撥音化しない。以下では、3 モーラ以上の動詞と「やる」「なる」を撥音化しやすい動詞、「やる」「なる」以外の 2 モーラの動詞を撥音化しにくい動詞とする。

表 10　否定辞ネーの前のラ音の撥音化の状況（五段動詞）

| 動詞 | | 撥音化なし | 撥音化あり | 撥音形の割合（%） |
|---|---|---|---|---|
| 3 モーラ以上 | わかる | 3 | 81 | 96.43 |
| | その他 | 4 | 29 | 87.88 |
| 2 モーラ | やる、なる | 0 | 14 | 100.00 |
| | その他 | 67 | 2 | 2.90 |

ナイとネーの前の撥音化に関して、「わかる」、「やる」、「なる」が極めて撥音化しやすいのは他の方言に関する調査でも示されている。例えば、田附（2019）は宮城県の気仙沼市と名取市の方言における否定辞の前（ナイとネーを一括して）のラ行音の撥音化を調査し、両地点とも最も撥音化が出現した動詞は「わかる」、「なる」、「やる」であることを指摘している。興味深いことに、表 8、表 10 に示す通り、首都圏方言でも撥音形は「わかる」（ナイとネーの合計で 1731 例）、「やる」（同 113 例）、「なる」（同 106 例）の順に多かった。この結果は、これらの動詞の馴染み度合いが高いことに起因する可能性がある。

一段動詞の場合は、ナイの場合と同じく、「しれる」「られる」「くれる」以外で撥音形の使用が確認できなかった。その状況を表 11 に示す。以下では、「しれる」「られる」「くれる」も撥音化しやすい動詞とする。

表 11　否定辞ネーの前のリ音、レ音の撥音化の状況（一段動詞）

| 動詞 | 撥音化なし | 撥音化あり | 撥音形の割合（%） |
|---|---|---|---|
| しれる | 1 | 12 | 92.31 |
| られる | 3 | 6 | 66.67 |
| くれる | 0 | 8 | 100.00 |
| その他 | 12 | 0 | 0.00 |

ネーはナイの連母音 ai が融合して生じた語形である。表 10、表 11 を分析すると、撥音化しやすい動詞では、連母音 ai の融合は動詞の標準形（「わからない」など）ではなく、既に撥音化が起こった形（「わかんない」など）において行われると推測される。例えば、スタイルが下がるほどに、「わからない」から「わかんない」、さらに「わかんねえ」へと語形が切り替わることになる。撥音化せずに連

母音aiの融合だけ生じる「わからねえ」はほとんど見られない（「わかる」の否定形の総数：1926例、わからねえ：3 例)。一方、撥音化が起こりにくい動詞では、撥音化しない標準形(「乗らない」など)においてaiの融合が行われ、「～らねえ」という形が生じる。ネーがかなり低いスタイルを表すため、撥音化の有無によるスタイル差が感じにくく、「～んねえ」と「～らねえ」のスタイル差が小さくなっている可能性がある。その結果として、「～んねえ」「～らねえ」の2つの語形がほぼ同じスタイルで使われるものとして競合することとなる。撥音化が起こりやすい動詞の場合は、「～んねえ」が「～らねえ」を押しのけることにより、競合が解消されると推測される。

「わかる」で否定辞ネーを使った語形について、久野（2018）の『新東京都言語図』(伊豆諸島、山梨県、埼玉県の話者のデータを除く）を確認すると、高年層話者（今回のコーパスで 90 代以上にあたる世代）は「わかんねえ」を回答した地点が多く、「わからねえ」も点在していたのに対し、若年層（同じく 40-50 代にあたる世代）では「わからねえ」を使う話者がいなかったことがわかる。「わからねえ」は使用が減少し、ほぼ使われなくなったのではないだろうか。ただし、今回のコーパス調査で、東京出身の話者で「わからねえ」を使ったのは 20 代の 2 名のみ（わかんねえ：14 例、わからねえ：2 例）で、世代差は検討できなかった。

表 12 に示したように、ナイの前のラ行音の撥音化は女性より男性で発生することが多いようである。これは、ドラマシナリオを基にラ行音の撥音化の性別差を調査した中村ほか（2003）の結果と共通している。興味深いことに、ネーの前のラ行音の撥音化については、性別差が見られなかった。性別を問わず、撥音化が起こりやすい動詞では「～んねえ」、撥音化が起こりにくい動詞では「～らねえ」を使うため、性差が見られないと考えられる。

表 12　話者の性別ごとの撥音化の出現率

| | ナイの前 | | ネーの前 | |
|---|---|---|---|---|
| | 撥音化なし | 撥音化あり | 撥音化なし | 撥音化あり |
| 女性 | 1786<br>(57.21%) | 1336<br>(42.79%) | 13<br>(37.14%) | 22<br>(62.86%) |
| 男性 | 1031<br>(45.16%) | 1252<br>(54.84%) | 77<br>(37.20%) | 130<br>(62.80%) |
| | $\chi^2$=83.02, p 値<0.01 | | $\chi^2$=0.00, p 値=1.00 | |

6. まとめ

本研究では、日本語日常会話コーパス（CEJC）に基づいて、首都圏方言における動詞の否定辞とそれに関わるラ行音の撥音化を調査した。首都圏方言では否定辞として圧倒的にナイが使用されることが多い。一方、非標準的な否定辞ネーとンもどの世代の話者によっても用いられている。

動詞の活用型の観点からすると、ンは五段動詞につきやすいことが確認できた。

言語外的観点からすると、多くの世代でンよりネーが多用されるが、若年層ではンの使用率がネーの使用率に極めて近くなる。ンの使用が増えているとすれば、それは、おそらく関西方言の人気の高まり、または、首都圏への移住者の出身地の変化と結びついていると推測できる。そして、スタイルが低すぎるネーと比べ、ンがより非標準性が弱い形式として意識され、若年層が性別を問わずンを使うようになる可能性もある。ネーは女性より男性が使う傾向が見られたが、ンの場合は性差が確認できなかった。

撥音化に関しては、五段動詞では、「やる」「なる」という例外を除き、終止形が2モーラの動詞より3 モーラ以上の動詞においてラ行音が撥音化しやすいことが確認できた。そして、撥音化が起こりやすい動詞の場合、ナイからネーという母音 ai の融合がほとんど例外なくラ行音の撥音化を伴う傾向がある。一段動詞では「かもしれない」「られない」「てくれない」という固定化された表現でのみ撥音化が見られる。

参考文献

川相典雄（2002)「人口移動に関する三大都市圏の比較分析」『経営情報研究 ： 摂南大学経営情報学部論集』9(2) ：17-38
久野マリ子編著（2018)『新東京都言語地図：音韻』國學院大學
斎藤純男（1986)「話し言葉におけるラ行音およびナ行音のモーラ音素化」『日本語教育』60：205-220

佐藤久美子・上村健太郎・木部暢子（2024）「日本語諸方言コーパス（COJADS）を用いた研究法」『方言の研究』10：203-222
真田信治（2009）『越境した日本語：話者の「語り」から』和泉書院
白岩広行（2015）「海外の日本語と方言－ブラジル日系社会における東日本出身者たちの西日本方言形使用」『方言の研究』1：161-184
孫範基（2016）「現代日本語における縮約形の形態･音韻的特徴－動詞活用におけるラ行音の撥音化について－」『日本學研究』49：363-385
高木千恵（2006）『阪大日本語研究別冊 2　関西若年層の話しことばにみる言語変化の諸相』大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
竹内はるか（2022）「首都圏方言における n と d の前のラ・リ・ル・レの撥音化」久野マリ子編著『新東京都言語地図：文法・語彙』國學院大學
田附敏尚（2019）「動詞におけるラ行音の撥音化・促音化現象」東北大学方言研究センター編『生活を伝える方言会話［分析編］―宮城県気仙沼市・名取市方言―』ひつじ書房：3-23
鶴岡里美（2016）「「ラレナイ」の撥音化の容認に関わる原因－不可能用法と受身否定用法の比較－」『日本語学会 2016 年度秋季大会予稿集』1-8
内閣府（2024）「地域課題分析レポート－ポストコロナ禍の若者の地域選択と人口移動－」（https://www5.cao.go.jp/j-j/cr/cr24-3/chr24-3_index-pdf.html）［2025 年 9 月 30 日閲覧］
中村フサ子・小泉美礼・樽田ミエ子（2003）「テレビドラマの会話に見られる縮約形の調査・分析」『東海大学紀要留学生教育センター』23：85-100
那須昭夫（2015）「縮約音声における二種類の撥音：ピッチ動態の比較」『文藝言語研究（言語篇）』68：97-120
パンチェンコ，ユーリイ・趙嘉怡・白岩広行（2024）「談話資料にみる首都圏若年層方言の否定辞使用とラ行音の撥音化」『立正大学國語國文』63：1-17
鑓水兼貴（2014）「「首都圏の言語」をめぐる概念と用語に関して」『国立国語研究所共同研究報告 13-02　首都圏方言の言語の実態と動向に関する研究　成果報告書　首都圏方言の視野』39-54
Ichimura, Larry (2006). Anti-homophony blocking and its productivity in transparadigmatic relations. Ph.D dissertation, Boston University, pp.1-240

## 《方言関係新刊書目》（120 号につづく）

国立国語研究所研究図書室が 2025 年 4 月以降に受け入れた図書の中から，2019 年以降の刊行物を選びました．なお，同図書室目録に未記載の文献でも，内容を確認したものは掲載しました．

お気づきの点は，日本方言研究会事務局

〒020-8550　岩手県盛岡市上田 3-18-33　岩手大学教育学部国語教育科　気付

hougen-jim@e-mail.jp

までお知らせください．

▼日本列島の音声分析：「音声録聞見 for Windows」による（新版）
今石元久，広島音声言語研究所，コンピュータ・ディスク 1 枚-12cm+ビデオディスク 3 枚.　2024(R06)年 09 月

▼生成 AI 時代の言語論
大澤真幸著，左右社，269p-19cm.　2024(R06)年 10 月

▼エンチウ(樺太アイヌ)語会話入門：改訂版
村崎恭子著，藤田印刷エクセレントブックス，116p+肖像+地図-26cm.　2025(R07)年 01 月

▼Gender, costume, textile, technique：women, clothing, cultural representation and modern Japan
edited by Barbara Hartley, Leiden：Brill, x+336pages+illustrations-25cm.　2025(R07)年 02 月

▼The Routledge handbook of endangered and minority languages
edited by Weixiao Wei and James Schnell, London：Routledge, xxi+444pages+illustrations-25cm.
2025(R07)年 02 月

▼うまれることば、しぬことば（集英社文庫さ 21-13）
酒井順子著，集英社，281p-16cm.　2025(R07)年 02 月

▼語(かだ)るびゃ・語(かだ)るべし青森県の方言報告書 2024
今村かほる編，弘前学院大学文学部今村かほる，96p+挿図（一部カラー)-30cm+DVD-R1 枚.　2025(R07)年 02 月

▼言語の交流：日本語と韓国語における借用語
金敬鎬著，博英社，ix+317p+挿図+地図-23cm.　2025(R07)年 02 月

▼誤解を招いたとしたら申し訳ない：政治の言葉/言葉の政治（講談社選書メチエ 821）
藤川直也［著]，講談社，337p+挿図-19cm.　2025(R07)年 02 月

▼沖縄語(しまくとぅば)保存継承事業報告書：令和 6 年度読谷村教育委員会文化振興課
読谷村史編集室編集，読谷村教育委員会文化振興課，60p+挿図-30cm.　2025(R07)年 02 月

▼写真で読み解く都道府県別方言大辞典
大西拓一郎監修，あかね書房，143p-31cm.　2025(R07)年 02 月

▼図解で学ぶめくるめく日本語史の世界
今野真二［著]，淡交社，143p+挿図-21cm.　2025(R07)年 02 月

▼東日本大震災被災地方言の記録・継承のための調査研究 3（文化庁委託事業報告書）
東北大学方言研究センター編，東北大学大学院文学研究科日本語学研究室，124p-30cm.　2025(R07)年 02 月

▼仏教由来の日常語事典
大正大学綜合佛教研究所現代日本語における仏教語源研究会編，丸善出版，xi+278p+挿図-20cm.　2025(R07)年 02 月

▼読谷村のしまくとぅば展[衣食住]展示資料集
読谷村教育委員会文化振興課読谷村史編集室編集，読谷村教育委員会文化振興課，64p-30cm.　2025(R07)年 02 月

▼Masculinities and language
Paul Baker and Gavin Brookes, Abingdon,Oxon,New York,NY：Routledge, [viii]+230pages+illustrations-24cm.
2025(R07)年 03 月

▼Negotiating gendered language and social identities：gender, race and native speaker ideology in learningJapanese as an additional language
Maki Yoshida, London：Routledge, [xi]+194pages+illustrations-24cm. 2025(R07)年 03 月

▼Stress and accent
Brett Hyde, Cambridge：Cambridge University Press, [xi]+353pages-24cm. 2025(R07)年 03 月

▼Understanding multilingualism：an introduction
John W. Schwieter, Aline Ferreira, Li Wei, Hoboken, NJ：Wiley-Blackwell, xiii+226pages+illustrations-26cm. 2025(R07)年 03 月

▼あきた弁一語一会
佐藤稔著, 秋田魁新報社, 319p-18cm. 2025(R07)年 03 月

▼ことばは変わるよどこまでも：日本語どんぶらこ
飯間浩明文,金井真紀絵, 毎日新聞出版, 191p-19cm. 2025(R07)年 03 月

▼岩手の方言と岩手県郷土教育資料
岩手県郷土教育資料研究会編, 杜陵高速印刷出版部, 261p+挿図-21cm. 2025(R07)年 03 月

▼樺太アイヌ語例文集：完全版
藤山ハルロ述,村崎恭子採録･著,[丹菊逸治編集],北海道大学アイヌ･先住民研究センター,171p-30cm+DVD1 枚 (12cm). 2025(R07)年 03 月

▼キツネの女の昔話：ナジェジダ・タンジナの伝承
ナジェジナ・タンジナ著・朗読,丹菊逸治編訳, [北海道大学アイヌ・先住民研究センター], 87p+ 地図+肖像-26cm+ CD-ROM1 枚 (12cm). 2025(R07)年 03 月

▼式亭三馬『浮世風呂』に広がる江戸語コミュニケーションの研究 (科学研究費補助金(基盤研究 C)研究成果報告)
小川栄一, [小川栄一], vi+232p+挿図-30cm. 2025(R07)年 03 月

▼全国方言文法辞典資料集 9：活用体系 7 (科学研究費補助金(基盤研究 A)研究成果報告)
方言文法研究会編, [方言文法研究会], 94p+地図-30cm. 2025(R07)年 03 月

▼多文化共生社会における情報発信を再考する (神奈川大学人文学研究叢書 53)
神奈川大学人文学研究所「言語景観と多文化共生」共同研究グループ編, くろしお出版, vi+249p-22cm. 2025(R07)年 03 月

▼中世末期日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系：古代から現代までの変遷を見通す
福嶋健伸著, 三省堂, xvii, 570p-22cm. 2025(R07)年 03 月

▼長濱清蔵のアイヌ語：十勝地方の物語
湘南アイヌ語研究会編,藤田護, 瀧口夕美, 中川裕著, 図書出版みぎわ, 191p+挿図-21cm. 2025(R07)年 03 月

▼ハリー・ポッターの「ことば学」(奈良女子大学文学部「まほろば」叢書)
吉村あき子,須賀あゆみ [著], かもがわ出版, 155p+挿図-21cm. 2025(R07)年 03 月

▼東アジアから日本へ越境する人々の「言語」と経験：1980 年代後半以降を中心に
市川章子著, ひつじ書房, xii+264p-22cm. 2025(R07)年 03 月

▼兵庫県但馬地方及び周辺域言語地図
峪口有香子 [ほか] 編, 四国大学地域教育・連携センター日本語学研究室, IV+82p+挿図+地図-30cm. 2025(R07)年 03 月

▼複数言語で育つ子どもたちの可能性：ボリビアの日系人からの学び
吉富志津代編著, 現代人文社,大学図書, 173p+挿図-21cm. 2025(R07)年 03 月

▼方言・時代変することば、略変することば
神永曉監修, 鈴木出版, 40p+挿図-29cm. 2025(R07)年 03 月

▼放送で気になる言葉：2025
新聞用語懇談会放送分科会編，日本新聞協会，127p-21cm. 2025(R07)年03月
▼昔話の会・方言かるたによる地域方言意識の向上プロジェクト：消滅の危機にある方言の記録作成及び啓発事業「東日本大震災被災地方言の記録作成及び啓発事業」(東北大学)：令和6(2024)年度
杉本妙子編著，[茨城大学人文社会科学部]，56p-30cm+ビデオディスク1枚. 2025(R07)年03月
▼ユリヤ・ミグルト伝承集
ユリヤ・イヴァノヴァ・ミグルト口述,丹菊逸治編訳，[北海道大学アイヌ・先住民研究センター]，155p+地図-26cm. 2025(R07)年03月
▼What's wrong with stereotyping?
Erin Beeghly, New York：Oxford University Press, [ix]+249pages+illustrations+ photographs-23cm. 2025(R07)年04月
▼The handbook of linguistic landscapes and multilingualism
edited by Durk Gorter and Jasone Cenoz, Hoboken：Wiley Blackwell, xviii+613pages+color illustrations-26cm. 2025(R07)年04月
▼「声」の言語学入門：私たちはいかに話し、歌うのか（NHK出版新書741）
川原繁人著，NHK出版，266p-18cm. 2025(R07)年04月
▼沖縄ことばの遊び庭
大城和喜著，インパクト出版会，349p+挿図-21cm. 2025(R07)年04月
▼新明解日本語アクセント辞典：第2版（新装版）
秋永一枝編，三省堂，28+994+129p-19cm. 2025(R07)年04月
▼日本社会と継承語教育：多文化・多言語環境に育つ子どもたち
松永典子,郭俊海,柳瀬千惠美共編，九州大学出版会，vi+217p+挿図-21cm. 2025(R07)年04月
▼ゆれる日本語、それでもゆるがない日本語：NHK調査でわかった日本語のいま
塩田雄大［著]，世界文化社，255p+挿図-19cm. 2025(R07)年04月
▼DNAと言語学
牧秀樹,宮﨑順大著，開拓社，vii+161p+挿図+地図-21cm. 2025(R07)年05月
▼Frege：identity challenges reflection：a revisionist view
Ulrich Pardey and Kai F. Wehmeier, New York：Oxford University Press, [xii]+332pages-24cm. 2025(R07)年05月
▼一般言語学から見た日本語の音韻構造
窪薗晴夫著，くろしお出版，348p-21cm. 2025(R07)年05月
▼大阪ことばの謎（SB新書691）
金水敏著，SBクリエイティブ，255p-18cm. 2025(R07)年05月
▼大阪弁の深み：その独特の魅力を味わう
札埜和男著，PHP研究所，225p+挿図-18cm. 2025(R07)年05月
▼郷土に向かい合う人々：信州・諏訪の市民科学（「市民科学」プロジェクト2024年度シンポジウム集録）
大西拓一郎編，「市民科学」プロジェクト，iii+52p+挿図-30cm. 2025(R07)年05月
▼近代日本語の時制体系（言語学翻訳叢書第23巻）
H・A・スィロミャートニコフ著,鈴木泰,松本泰丈,松浦茂樹訳，ひつじ書房，xix+375p+挿図-21cm. 2025(R07)年05月
▼魚の耳で海を聴く：海洋生物音響学の世界：歌うアンコウから、シャチの方言、海中騒音まで
アモリナ・キングドン著,小坂恵理訳，築地書館，351p+挿図-20cm. 2025(R07)年05月
▼島根県方言集成(出雲・石見・隠岐)：人間愛の言葉
ワン・ライン編，ワン・ライン，930p-20cm. 2025(R07)年05月

▼新幹線用語集
富田松雄著，イカロス出版，145p+挿図-21cm. 2025(R07)年05月
▼速記と録音と日本語の近代
清水康行[著]，くろしお出版，iv+395p+挿図-22cm. 2025(R07)年05月
▼読書調査の歴史と資料：戦前・戦中
和田敦彦著，樹村房，viii+130p-21cm. 2025(R07)年05月
▼名古屋地名さんぽ
杉野尚夫著，風媒社，180p-21cm. 2025(R07)年05月
▼方言札の近現代史：沖縄言語教育の研究
梶村光郎著，不二出版，309+iip-22cm. 2025(R07)年05月
▼まじめに動物の言語を考えてみた
アリク・カーシェンバウム[著],的場知之訳，柏書房，326p+挿図-20cm. 2025(R07)年05月
▼Frege's pragmatics
Thorsten Sander, London：Bloomsbury Academic, xiv+231pages-24cm. 2025(R07)年06月
▼Synchronic and diachronic approaches to tonal accent
edited by Pavel Iosad, Björn Köhnlein, Oxford：Oxford University Press, [xiv]+275pages+illustrations-24cm. 2025(R07)年06月
▼出雲國風土記註解（風土記註解シリーズ2）
廣岡義隆校註，和泉書院，1086p ： 挿図，地図-22cm. 2025(R07)年06月
▼集団語大辞典
米川明彦編著，東京堂出版，8+1813p-22cm. 2025(R07)年06月
▼条件表現の史的変遷と接続詞（小林賢次著作集第1巻）
[小林賢次著],小林千草編，武蔵野書院，xi+420p-22cm. 2025(R07)年06月
▼高根沢の民話：語り部が方言で書いた
たかねざわ民話の会著，下野新聞社，147p+挿図-21cm. 2025(R07)年06月
▼役割語とキャラクター：ポピュラーカルチャーをより深く理解するために
金水敏編，研究社，viii+286p+挿図-19cm. 2025(R07)年06月
▼柳田国男自伝：故郷七十年・拾遺・補遺（角川ソフィア文庫J102-18）
柳田国男[著],石井正己校注，KADOKAWA，767p+挿図+肖像+地図-15cm. 2025(R07)年06月
▼柳田国男と民俗学の近代：奥能登のアエノコトの二十世紀
菊地暁著，岩波書店，vii+388+15p+地図+挿図-15cm. 2025(R07)年06月
▼琉球処分：「沖縄問題」の原点（中公新書2860）
塩出浩之著，中央公論新社，v+266p+挿図+肖像+地図-18cm. 2025(R07)年06月
▼An introduction to language attrition：linguistic, social, and cognitive perspectives
Michael T. Putnam and David Natvig, New York, NY：Routledge, xi+177pages+illustrations-30cm. 2025(R07)年07月
▼「打ちことば」の研究：モバイルメディアコミュニケーションから再考する日本語（ひつじ研究叢書（言語編）第216巻）
落合哉人著，ひつじ書房，VIII+351p+挿図-22cm. 2025(R07)年07月
▼井川方言基礎語彙集2025年版
横山晶子［ほか］編，［国立国語研究所］，139p+地図-26cm. 2025(R07)年07月
▼言語行動論考
杉戸清樹著，ひつじ書房，XV+576p-22cm. 2025(R07)年07月

▼ことばはおもしろい：上巻

斎藤稔［著］，東京図書出版，リフレ出版，508p-22cm.　2025(R07)年07月

▼ことばはおもしろい：下巻

斎藤稔［著］，東京図書出版，リフレ出版，496p-22cm.　2025(R07)年07月

▼Corpus linguistics for sociolinguistics：a guide for research

Joan O'Sullivan, Carolina P. Amador-Moreno and Anne Barron, Abingdon, Oxon：Routledge, xi+270pages+illustrations-24cm.　2025(R07)年08月

▼ヤポネシアの考古と言語（シリーズ〈ヤポネシア人の起源と成立〉4）

藤尾慎一郎，遠藤光暁，木部暢子編，朝倉書店，244p-21cm.　2025(R07)年08月

（担当：山岡華菜子）

## ― お　知　ら　せ ―

**〈次回のお知らせ〉**

次回の第 122 回の研究発表会は，**2026 年 5 月 22 日（金）**（日本語学会春季大会前日）に立命館大学朱雀キャンパスにて開催の予定です。

**〈発表募集〉**

1. 応募資格・条件：方言研究に関心をお持ちの方なら，どなたでも応募することができます。研究発表は，日本語方言とその関連領域に関する未発表のものとし，1 題につき発表 30 分，質疑 20 分（予定）です。
2. 応募締切：**2026 年 2 月 13 日（金）**必着
3. 応募書類：次の 2 点（A4 判用紙計 2 枚）をご提出ください。
   a. 申込書：A4 判用紙 1 枚に，発表題目・氏名・所属・研究略歴・連絡先（住所，電話番号，メールアドレス）を記載してください。
   b. 発表要旨：冒頭に発表題目を記した上で，研究の目的・方法・結論を具体的に明記してください。氏名・所属は記載せず，本文においても応募者が特定できるような表現を避けてください。分量は，図表等込みで A4 判用紙 1 枚以内です。
4. 応募先と応募方法：下記連絡先①（研究発表会委員会）宛に，メールの添付ファイル（Microsoft Word もしくは PDF）でお送りください。その場合，特殊な記号を使うなど，文字化けが予想される場合には，プリントアウトしたものをスキャンした形で PDF ファイルをお送りください。
5. 応募可能数：筆頭発表者として応募できるのは 1 件です。応募書類の提出者を筆頭発表者として扱います。
6. その他：研究発表会委員会で審査の上，採否を決定します。採用決定後，発表題目，発表者名（連名発表の場合，氏名の順序も）は変更できません。採用された方には，**2026 年 4 月 20 日（月）**までに発表原稿集の原稿を提出していただきます。その他，詳細はホームページをご覧ください。

連絡先①
研究発表会委員会（委員長：佐々木冠）
〒603-8577　京都府京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学大学院独立研究科気付
hougen-happyou@e-mail.jp

連絡先②
事務局（総務委員長：竹田晃子）
〒020-8550　岩手県盛岡市上田 3-18-33
岩手大学教育学部国語教育科気付
hougen-jim@e-mail.jp

日本方言研究会ホームページ　http://dialectology-jp.org/

# Conference Papers of the Dialectological Circle of Japan

No. 121 (November 1, 2025), Online

**Presentation**

1. MAEDA Keiko: Phonological Changes in the Dialect of Yaburoki Island, Nagasaki Prefecture: Focusing on *Sussaku*

2. SHIRATORI Shiori: “Exceptions” to Arisaka-Ikegami’s Law in Iki, a Hichiku Language

3. TASAKI Rion: Dialect Use on Product Packaging Sold in Municipal Satellite Shops: Linguistic, Regional, and Product-Category Trends

4. KATSUMATA Kotona, KAJUN Sakiho, AKAMA Sakura, SATO Miina and YAMADA Haruka: A Proposal for the Classification of the Usage of *Hora*: Based on Data from the “Corpus of Japanese Dialects” (COJADS)

5. PANCHENKO Yury: On the Use of Negative Forms and the Nasalization of the R-sound in the Tokyo Metropolitan-Area Dialect: A Corpus-Based Study